
Powergame in The Hell (下)

粟吹一夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Power game in The Hell (下)

【Nコード】

N3328Z

【作者名】

栗吹一夢

【あらすじ】

交通故で死んでしまい靈魂となって漂っていた俺が、ソウルハンターの御上靈奈と名乗る金髪ゴスロリ少女に地獄に連れて行くと言われて、ついに行った所は、俺がいた世界「地界」の並列社会である「獄界」だった。獄界には人の死亡を確実に予想する「エンマ」というスーパーコンピュータと靈魂を管理する「地獄」という施設があり、俺も地獄に行くはずだったのだが、俺は、俺達を襲って来た黒ローブを着た謎の男の肉体を得て獄界で生き返ってしまった。

「地界」に帰ることができなくなった俺は、靈奈の家、すなわち

御上家に居候をさせてもらうことになったが、靈奈には家庭的な和風美人の姉「幽奈さん」と獄界のアイドル「妖奈ちゃん」という妹がいて、しかもその三姉妹の父親「龍岳さん」は獄界政府の政権与党「神聖自由党」の副幹事長をしている国会議員だった。御上家で居候をさせてもらっているうちに何かしら自分のできることをしたいと考え始めた俺は、猛勉強の末、靈奈と同じソウルハンターになることができたが、その後、龍岳さんと一緒に神聖自由党本部を訪れてから、何故だか刺客に狙われるようになる。しかし、その刺客との戦いで俺が得た肉体に隠されていた超人的な能力が目覚める。

神聖自由党における派閥抗争と三姉妹の兄弟で三年前に死んだ「龍真さん」を巡る陰謀が明らかになれば、俺と靈奈は俺たちを襲って来た刺客達の黒幕の本拠地に取り込んで行った。異世界を舞台とした活劇に、「政治」というスパイスを加味し、「死後の世界感」を添えてみました。

(前書き)

第三章の途中から掲載

俺が獄界に来てから数日が過ぎた。

学校の勉強はまったく楽にならなかった。慣れていないだけというのは単なる言い訳にすぎず、やっぱりレベルが高すぎた。

かといって居候させてもらって学校にも通わせてもらっている手前、地界にいた時の三倍は勉強をした。いや、俺にとっては一生分をまとめてしたと言っても過言ではない。これまでほとんど使わなかった脳を酷使しただけに疲労困憊って感じた。

しかし獄界にも土曜日と日曜日があった。だが、待てよ。一週間って聖書から来ているんじゃないかなかったっけ？ 獄界の創造主も七日目には疲れたってことなんだろうか？

まあ、そんなことはどうでも良い。獄界に来て初めての休日だ。久しぶりに朝寝坊するかなと思っただけで目覚まし時計をセットしないでいたのに、いつもと同じ時間に自然と目が覚めてしまった。

もう少し寝ようとしていたら、ドアがノックされた。

「真生さん、朝ご飯ができましたよ」

「あつ、はい。今、起きます」

幽奈さんの優しい声で起こされると起きざるを得ないだろう。霊奈の声だったら無視して寝てるけどね。

パジャマのままダイニングに行くと、妖奈ちゃんが今日はちゃんと洋服に着替えて朝食を食べていた。今日は休日だからか、珍しくトーストとベーコンエッグ、サラダに紅茶という洋食メニューだった。

「あつ、お早う、真生兄ちゃん！」

「お早う。今日は学校休みなのに早いなだね」

「そろそろ迎えの車が来るはずなの。学校が休みの時は番組の収録とかレコーディングとかの書き入れ時だから」

そうか。ちゃんと中学校にも通っている妖奈ちゃんがまとま

って芸能活動のための時間が取れるのは学校の休日しか無いよな。間もなく玄関のチャイムが鳴った。どうやら妖奈ちゃんの芸能事務所の迎えの車が来たようだ。

「それじゃあ、行ってきま〜す」

妖奈ちゃんはトーストを一欠片持ったまま席を立った。

「妖奈、大丈夫？」

幽奈さんが妖奈ちゃんの側に寄りながら心配そうに声を掛けた。

「大丈夫だって。トースト二枚も食べちゃったし」

「無理しないようにね。晩ご飯は？」

「たぶん間に合わないと思うから用意しなくていいよ」

「分かった。行ってらっしゃい」

「じゃあね、真生兄ちゃん」

妖奈ちゃんはニコニコと俺に手を振りながらダイニングから出て行った。

幽奈さんが妖奈ちゃんの食器を片付け始めると食卓にはもう俺の食器しかなかった。

「幽奈さん。霊奈は？ ひよつとしてまだ寝ているんですか？」

「霊奈も今日はお仕事があると言って、もう出かけましたよ」

「仕事って、死神の仕事ですか？」

「ふふふふ。そうですね。でも死神って面白いネーミングですね」

いや、俺が付けた名前じゃないんですけど……。

「霊奈は晩ご飯までには帰って来ると言っていましたよ」

「そうですね。……それじゃ龍岳さんは？」

「お父様も党本部に出かけています」

「……そうですね」

ということ今日は幽奈さんと二人きり。……俺、ちゃんと理性が保てるかな？

いやいや、そんなことより、この家族はみんなが休日も働いている。幽奈さんも家事を一手に引き受けている。居候の俺が何もしていないことがちよつと後ろめたくなってきた。せめて幽奈さん

の手伝いでもしようかな。

「幽奈さん。俺、今日はずっと暇ですから何かお手伝いできることがあれば言ってください。お使いでも掃除でも何でもしますよ」

「ありがとうございます。でも真生さんにやっていただくと私の仕事が無くなってしまいます。真生さんもせっかくこっちの世界にやって来たんですから、色々と見学に出かけられたらいいんじゃないですか」

良いな、幽奈さん。断り方にも暖かさがあるというか、品があるというか。

「それじゃあ、お言葉に甘えて、ちょっと出かけてみます」

「ええ、どうぞ。……あつ、そうだ」

幽奈さんは、何かを思い出したかのように一旦ダイニングから出ていったが、すぐに携帯電話を一つ持って戻ってきた。

「これ、真生さんの携帯です。家族みんなの番号も登録していますから持っててください。出かけられて困ったことがあったら、すぐに連絡をしてくださいね。私は今日はずっと家にいますから」

幽奈さんとのホットラインゲット！

「それから、これも……」

幽奈さんは紙幣を何枚か俺にくれた。

「お金が無いと困るでしょう」

「こんなに良いんですか？」

「自分の気に入った服とかもそれで買ってください」

とつと俺を放り出そうとした誰かさんとは大違いだぜ。

俺は出掛ける前にネットで獄界の地図を確認してみた。並列世界だけあって、その地形は地界とまったく同じであり、違うのは地図上に国境が無い事だけだった。そして、一つの国でもある獄界の首都は、エンマのある所、地界での東京と同じ位置にある、その名も「エンマシティ」であった。龍岳さんの家もエンマシティの郊外にあった。

俺は印刷した地図をポケットに入れて家を出た。学校までの通学路は何回か通ったが、それ以外の場所には一人で行ったことが無い。玄関の前でまずはこの近辺の地図を見ながら辺りを見渡してみた。……まずはここから歩いて五分くらいの所にある地下鉄の駅に向かうとするか。

んっ、何だ、ありゃ？

駅に向かって歩こうとした俺は電柱の影から突き出ていた大きなカメラのレンズが引っ込むのを見た。……今度は隠し撮りか？ 何で俺って獄界ではこんなにモテるんだ？

俺はしらばっくれて、その電柱の方向に歩いて行つた。電柱を通り過ぎると見せ掛けて、急いで振り返ると、大きなカメラを持った男が逃げようとしていた。

「待て！ どうして逃げる？」

俺はすぐにその男を捕まえて首根っこを押さえ付けた。

「おい、人の家の前で何を撮影しているんだ？」

「すみません、すみません。何にも撮影なんかしていません」

既に涙声になっているそいつの顔をみて驚いた。

「狐林じゃないか！」

「あつ、真生の旦那」

狐林の奴、地獄で仏を見たような安堵の表情を浮かべやがった。でも、いくら友人でも許されることと許されないことがあるぞ。

「何しているんだ、こんな所で？ しかも、そんな大きなカメラを持ちやがって」

「いや、この辺りの風景も良いですがね。言い忘れていましたけど、あつしは写真を撮ることが趣味なんですよ」

「この住宅街のどこにカメラマンの芸術心を煽るような風景があるというんだ。お前、まさか俺の家、というか霊奈の家を盗撮しようとして隠れていたんじゃないだろうな？ 返答次第では俺も怒るぞ！」

俺は狐林の胸ぐらを掴んで締め上げた。

「ひえ〜、ご勘弁を。けつして風呂場を覗こうとかカーテンの隙間から寝室を覗こうとかしていません」

自分から白状してんじゃないかよ。

「俺は一応、この家の三姉妹の親戚だからな。そんな犯罪みたいなことを許すわけにはいかないぞ」

「本当に何もしていませんでがすよ。妖奈ちゃんが出て来るのを待っていただけでがす」

「それじゃ撮影済みの画像を見せてみる」

俺は撮影済み画像をデジタルカメラの画面で逐一確認したが、この家の周辺で撮影したような写真は一枚もなかった。もつともどこかのステージを撮影したような妖奈ちゃんの写真は複数枚残っていた。

「お前、本当に妖奈ちゃんのファンなんだな」

「妖奈ちゃんはあるの天使なんです。今日も妖奈ちゃんのお姿を見たくて、ここにやって来てしまったんですが」

「あのなあ、ステージの妖奈ちゃんを撮影するのは結構だが、この家にいる妖奈ちゃんは御上妖奈という、まだ中学二年生の女の子なんだ。家まで押し掛けてプライベートの写真まで撮ろうとするのは感心できないな」

「わ、分かりやした。旦那がそうおっしゃるんであれば今後一切しやせん」

「そうしてくれ。それに今日は妖奈ちゃんとはとっくに出かけているぞ」

「え〜、そんな〜。ずっとここで妖奈ちゃんが歩いて来てくるのを待っていたのに〜」

まったく危ない上に馬鹿だ、こいつは。アイドルの妖奈ちゃんが歩いて収録現場まで行くと思っていたのか？

俺は狐林を無視して行こうと思ったが、こんな変態野郎を野放ししておく方が危ない。それに学校で話してくれる狐林の話は、けっこう俺に好みにびったんこだったりする。

「おい、狐林。それよりお前、今日は暇か？」

「えっ？」

「俺も最近この街に引っ越してきたばかりだから、ちょっと見物が
てら出掛けているんだよ。どこか面白い所があれば俺を案内してく
れないか？」

「お安い御用ですが、旦那」

俺から説教されると思っていたのか、狐林はそうならなかったこ
とに安心しているようだった。

「でも旦那。旦那はどんな所に行ってみたいんですがすか？」

そうだな。やっぱりこつちの世界でもエロゲが気になるし…
…いや、待て待て。そんなことを言ったら妖奈ちゃんを守るとい
俺の言葉がそのまま風に吹かれて飛んで行ってしまっぞ。

「そ、そうだな。コンピュータ関係の店がある所がいいな。後はゲ
ームとか漫画とかの店もあれば見てみたいな」

「何だ。奇遇ですね、旦那。あっしもそつち方面は相当詳しいで
すからお任せくださいえ」

「そうか。頼むよ」

「ここの近くの駅から電車で二十分くらいの所にあっしがよく行っ
ているオタクの街がありますぜ。かなりコアですけど、旦那、つい
てこれやすか？」

こつちにもオタクという言葉があるのか。

「大丈夫だ。問題無い。ところでそのオタクの街って何ていう所な
んだ？」

「アキバって街ですよ」

「アキバ？ 秋葉原じゃなくて？」

「何ですがすか、秋葉原って？」

「あっ、いや、何でも無い。それじゃそこに行ってみようぜ」
「ラジャー！」

返事は普通で良いから……。

俺と狐林は地下鉄を乗り継いでアキバ駅で降りた。駅から地

上に出ると、そこには何だか見覚えのある風景が広がっていた。もちろん、秋葉原ではない。しかし、電気店やパソコンショップ、アニメショップ、メイドカフェ……。まさに獄界の秋葉原だ。オタクは時空を超えた世界共通語だ！ オタク万歳！

とりあえず俺と狐林はパソコンショップに入り、ゲームソフトコーナーを見て回った。

地界と全く変わらない。シミュレーションゲームもロールプレイングも、もちろんエロゲもあった。さすがに「信長」とかの世界の偉人達の名前を冠したゲームはなかったけどね。

俺が色々とパッケージを見ていたら、狐林の奴、自分のお気に入りのエロゲの講釈を延々としゃべり出しやがった。……まず、周りの人の目を気にしようぜ。大きな声でエロゲのプレイ感想をしゃべられたら、みんな引くぞ。ここは一応まともなパソコンショップなんだからな。

すっかりと妹もののエロゲを買い込んだ狐林は、一緒にパソコンショップを出た俺に向かって腕時計を見ながら焦った声で言った。

「おお、旦那、もう十一時ですがすよ。近くのアキバ中央公園の野外ステージに行きやしよう」

「何があるんだ？」

「妖奈ちゃんの新曲発表キャンペーンに決まっているでしょうが」俺と狐林は歩いてすぐのアキバ中央公園にやって来た。公園というよりもビルに囲まれた広場という場所で、その中央にステージが組まれていた。ステージの前は既に立ち見の客でいっぱいだったが、男性と女性の比率は九対一というところで、なんだか、むさ苦しい空気に包まれていた。揃いの法被を着て「あやな命」の鉢巻きをした親衛隊のような連中も大勢いた。

間もなく曲のイントロが流れ出し、スキップを踏みながら妖奈ちゃんが登場した。野郎どもの凶太い声援がうるさいくらいに響いている。俺と狐林も全席立ち見の客席の中間くらいでステージを見ていた。

それにしても家で見る妖奈ちゃんも可愛いけど、アイドルしている時の妖奈ちゃんは後光が差しているな。

妖奈ちゃんは歌の途中で俺に気づいたみたいで、俺の方を見ながら笑顔で手を振ってくれた。俺も思わず小さく手を振り返した。

「旦那、見ましたか？ 今、あつしの方を向いて妖奈ちゃんが手を振ってくれましたよ。へへへへへへ」

鼻息荒すぎだ。それにしても、妖奈ちゃんの笑顔+手を振り振り親衛隊のようなファンの野郎どもからの痛い視線という方程式。殺気を感じるね。狐林の野郎は良いな、鈍感で。

歌を歌い終わった妖奈ちゃんは、司会者から訊かれた新曲についての話を五分ほどしてからステージの袖に下がった。見えなくなる前にもう一度、明らかに俺に向かって手を振ってくれた。

「どうしようかな、明日から。旦那！ 男、山里狐林はいつでも妖奈ちゃんの気持ちを受け止める覚悟があると妖奈ちゃんにお伝えくたせえ」

狐林は、最後の手振りも自分に対して振ってくれたんだと勝手に思い込んでいるようだ。お前は俺が妖奈ちゃんと一緒に暮らしている仲だという現実が見えていないのか？

「旦那。午後からの部も見ますか？」

「いや、もういいや」

「それじゃあ、これからどこに行きやすか？」

「そうだなあ」

俺と狐林は牛井屋で大盛りを平らげた後、ゲームセンターに行つて対戦ゲームに興じた。気がつくとき空が夕焼けに染まる頃になっていた。

俺が家に帰り玄関に入ると、妖奈ちゃんの靴が揃えて置かれていた。

今日は帰りが遅くなるんじゃないかなかったっけ？

俺が靴を脱いでいると、廊下の奥のドアから幽奈さんがタオルを

入れた洗面器を持って出て来た。

「あら、真生さん。お帰りなさい」

「ただいま帰りました。幽奈さん、掃除ですか？」

「いいえ。これは妖奈の部屋に持って行くんです」

「妖奈ちゃん、帰って来ているんですか？ 確か、今日は遅くなるって言っていましたけど」

「妖奈、高熱を出して倒れちゃったんです」

「えっ！」

「仕事も早引けしてお医者様に診てもらったんですけど、過労だろうということだ。二・三日は静養を要するみたいなんです」

昼間のキャンペーンステージでは、あんなに笑顔を振りまいて元気そうだったのに……。

「俺も妖奈ちゃんの部屋に行つて良いですか？」

「どうぞ」

俺は幽奈さんと一緒に二階の妖奈ちゃんの部屋に行った。二階には、俺と靈奈の部屋が隣り合っており、靈奈の部屋の向かいが妖奈ちゃんの部屋だった。

そう言えば、妖奈ちゃんの部屋に入るのは初めてだ。家具も壁の色もピンクの色で統一した妖奈ちゃんらしい、ぶっ飛んだ部屋だ。

妖奈ちゃんはおでこに濡らしたタオルを乗せてベッドに横になっていた。やっぱりちよつと顔が赤くなっているような気がする。

「あつ、真生兄ちゃんも帰つて来たんだ」

「あ、ああ。ただいま。妖奈ちゃん、昼のステージではあんなに元気そうだったのに」

「本当は朝もちよつと熱があつたんですよ。私はお休みしたらって言ったんですけど」

幽奈さんが額のタオルを取り替えながら教えてくれた。

「真生兄ちゃんが来てくれていた午前のステージが終わったら、ほつとして力が抜けちゃったのかな。ふつと意識がなくなって、気がついたら病院のベッドで寝ていたの」

「熱があつたのにステージに上がっていたのかい？」

「いっぱいお客さんが来てくれていたし、今度のキャンペーンには事務所もすごく力を入れてくれていたから、絶対、ステージに上がりたかつたの」

ちくしょう！　こんな小さな女の子が熱をおして頑張っていたのに、今日、俺はいつたい何をしてたんだ。

「でも食欲も出てきたし、もう大丈夫だよ。ねえ、幽奈」

「駄目です。明日もお休みしなさい。明日、お医者様に診ていただいて大丈夫なら復帰していいわよ」

「ちえ〜」

「何ですか、そのお返事は」

「は〜い。……もう、幽奈ったら、お母様みたいになってきた」

頬を膨らませて幽奈さんを睨んだ妖奈ちゃんは、狐林が言つたみたいに、本当に天使に見えた。モテたいとかチャホヤされたいとか、そんな浮ついた気持ちで芸能人をやっているんじゃないかと、歌や踊りが本当に好きで、それができないことに本気で怒っているけど、自分の体をこれまた本気で心配してくれているお姉さんのことも好きで　何て言うか、本当にピュアな女の子なのだ。俺は妖奈ちゃんのために何をしてあげられるんだろうって、本当の兄貴のような気分になってきた。

夕食時、龍岳さんは今日も帰りが遅いようだったが、妖奈ちゃんもちゃんとダイニングに降りてきて三姉妹が揃って食べた。

夕食のちよつと前に帰宅した靈奈も妖奈ちゃんが心配だったようだ。

「それだけ食べられるんだつたら大丈夫ね」

「うん。幽奈のご飯を食べたら直つちやつた」

「駄目ですよ、妖奈。少なくとも明日はお休みしなさい。明日もそんな調子だったら明後日からはお仕事を始めても良いわよ」

「は〜い」

なんだかんだ言っても妖奈ちゃんは幽奈さんの言うことには素直に従っている。この三姉妹は本当に仲が良いな。

「ところで真生。今日はどこに行っていたの？」

「えっ、……………アキバにちょっと」

「一人で？」

「狐林と一緒に」

「ふ〜ん。やつぱり類は友を呼ぶなのね」

おい、俺を狐林と一緒にするな！……………って言う資格は俺には無いな。

「狐林さんって、真生兄ちゃんの隣で鼻の下を伸ばしていた人？」

「ああ、妖奈ちゃんのファンらしいぜ」

「本当？ 真生兄ちゃん、狐林さんにもステージを見に来てくれてありがとうって伝えておいてくれる？」

「あ、ああ。……………妖奈ちゃん、俺も妖奈ちゃんのファンだけ。」

妖奈ちゃんの元気なステージをまた見たいから、明日はちゃんと休んで、明後日から頑張れよな」

「ありがとう、真生兄ちゃん」

「真生。妖奈のファンの子達から袋叩きに遭わないように行動には注意しなさいよね」

「だから、俺は妖奈ちゃんの本当の兄貴のような気持ちで言っているんだ。妖奈ちゃんに近づいてくる変態どもは俺が成敗してやる。」

「はははは」

「かつこい〜い。真生兄ちゃん」

「任せなさい」

「まずは自分を成敗しないとね」

「霊奈！ それはどういうことだよ？……………って、幽奈さんも

妖奈ちゃんも腹を抱えて笑っているし。……………俺も一緒に笑うしかないじゃん。」

地界では夕食後、俺はすぐに自分の部屋に閉じ籠もってパソコンの前に座り自分の世界に没頭していた。しかし、この家では夕食後

もしばらくは自分の部屋に戻ることなく、この三姉妹と一緒におしゃべりをするが多かった。霊奈の言葉に時々イラつくことはあるが、霊奈や妖奈ちゃんの帰りが遅くて三姉妹が揃わない時は、何だか寂しい気持ちになってしまう。

この三姉妹という時の居心地の良さはどこから来るんだろうか？

翌日の月曜日からいつもの一週間が始まり、日曜日を挟んでまた次の一週間が始まった。獄界に来て、御上家で居候をしている間に俺の頭の中で一つの考えが段々と大きくなってきて、いつの間にかこびり付いて離れなくなってしまった。

それにしても俺は一体どうしてしまったんだろう？ こんなことを考える俺じゃなかったはずだ。一度死んでから性格まで変わってしまったんだろうか？

夕食が終わって自分の部屋のベッドに寝転がっていると、今日も何かをしたいと真剣に考えている自分に気がついた。

今まで何かをしなければならなかった使命感とか義務感を感じたことなんてなかった。

将来なりたい職業なんて夢でも考えたことは無いし、高校だつて、みんなが行っているから、なんとなくく通っていた。高校を卒業したら、学力に見合った大学に入って、四年間、好きなことをした後には、そこそこの会社勤めをして……、なるようになるってしか考えてなかった。

俺の親父は会社人間だけど出世しているわけでもなく、休日には家でゴロゴロしていることが多かったし、お袋もパートで働きに出ていたけどそれを言い訳にしてけっこう家事は手を抜いていたし、休日はテレビの前から離れることはなかった。美咲も中学校のテニス部に入部していたが、その動機は格好良い男の先輩がいたからだそう、練習もあまり熱心にやっていないみたいだった。そんな家族の中にいれば、俺が一人しゃかりきになって何かをしなくてはなんて思わないよな。

でも、今、俺は獄界にいて御上家で居候をさせてもらっている。

そして、龍岳さんととも霊奈とも幽奈さんとも妖奈ちゃんとも、血も繋がっていないければ、俺が世話されるだけの恩を売ったわけでもない。それなのに獄界では独りぼっちの俺をみんなが家族のように接してくれている。約一名、厳しい言葉を浴びせ掛けてくる奴がいるが、最初に家に来るように言ってくれたからな。

そして、この家族はみんな働き者だ。政治家の龍岳さんは最近はお朝食も夕食も一緒に食べることが無い。

霊奈も休日はソウルハンターの仕事に出ている。特に休日出勤を命じられているわけではないみたいだが、ソウルハンターの仕事にもっと熟練したいからと言って、志願して仕事を請けているようだ。妖奈ちゃんは中学校の授業にも欠かすことなく出席し、放課後や休日には番組の収録やコンサートをし、暇を見つけては歌と踊りのレッスンというハードスケジュールをこなしている。

幽奈さんは家事を完璧にこなしているし、料理の研究も怠らず、週に一回は必ず新しいメニューが登場する。

俺は、……………何もしていない。高校生だから勉強が仕事だといえはそうだが、レベルが高くてついて行くのがやっとの状態だ。それ以外で俺も何かをしなければって思い始めたんだ。これはけっして勉強から逃げているんじゃない。俺が突き進んでみたい道は、勉強の道ではなく別の何かだった。

でも、何をすればいいんだろう？俺はまだ高校生だし、どこかでアルバイトでもするしかないのか？

待てよ。……………高校生だってできる仕事があるよな。……………霊奈に訊いてみるか。

そう思い立った俺は部屋から出て、隣にある霊奈の部屋のドアをノックした。

「霊奈。ちよっと話があるんだけど」

「何？」

ちよっとだけドアが開くとその隙間から、部屋着にしているワン

ピーヌ姿の霊奈が顔だけ出してきた。 やれやれ、まだ俺という人間を誤解しているようだ。女の子をいきなり襲ったりしないって「ちよつと話があるんだけど、今、良いか？」

「何の話？」

「俺、……ソウルハンターになりたいんだ」

「えっ？」

「だから、霊奈に色々話を訊きたくてさ」

「……分かった。入って」

霊奈はドアを大きく開いて、俺を部屋に招き入れようとした。しかし、いざという時に弱気になる俺の方が躊躇ってしまった。

「入っても、……良いのか？」

「……そんなこと言うから変に意識しちゃったじゃない。……やっぱり応接間に行く」

霊奈と俺は一階の応接間に入って向かい合って座った。

「でも、突然どうしたの？」

「俺、ここで世話になってるけど、居候しているだけじゃ申し訳無いなあって思ってたさ」

「別にあんたは望んで獄界に来たわけじゃないから、そんなに気にすることは無いわよ」

あれっ、……確か二・三日で俺を追い出すつもりじゃなかったのか？

「でも、幽奈さんは家のことを一手に引き受けているし、霊奈も働いているだろう。それに妖奈ちゃんもすごく頑張っているし……俺も何かしなくちゃって思ったんだよ」

「……それで、どうしてソウルハンターになりたいって思ったの？」

「霊奈が俺には素質が有りそうだって言ってくれたからさ。それに、……霊奈と一緒に働けば良いなって思ったから」

「……で、でも、真生。ソウルハンターになることは、そんなに簡単なことじゃないわよ」

「認定試験の倍率が百倍を超えていることも知っている。一回や二

回の挑戦で受かるとは思っていないよ。何十年掛けても結局駄目かもしれないけど挑戦をしてみたいんだよ」

「うん」

霊奈は目を閉じて腕組みをしながら考えていたが、しばらくすると覚悟を決めたみたいに目を開けた。

「……分かった。真生がせっかくやる気を見せているんだから私も協力するわ」

「本当か？」

「ええ、ソウルハンターの専門学校もあるけど、私が個人レッスンしてあげる」

「こ、個人レッスン……」

何となく淫靡な響きがある言葉だ。

「……真生。何か変な期待をしているんじゃないでしょうね？」

「い、いや、そんなことはないよ」

「厳しくするわよ。ついて来られる？」

「お、おう」

「それじゃ、まずは幽体離脱ができるかどうかを確認しておかないとね。これができなければお話にならないからさ」

確かにそうだよな。いくら筆記試験の成績が良くても、幽体離脱ができないければ霊魂と接することはできないし、地界に行くこともできないんだからな。

「明日、学校から帰ったら、ちょっとやってみましょう」

翌日の夕方。

俺は家の庭に椅子を持ち出してそれに座った。近くには木刀をもった霊奈が立っていた。……何で木刀を持っているんだ？ できなければ、あれでぶっ叩かれて強引に霊魂を取り出すってことじゃないだろうな。

「いい、真生。まず自分の霊魂の存在をイメージするの。イメージできたらそれと同期をして殻を破るような気持ちで体から離れるの

よ。……それじゃ集中して！」

俺は目を閉じて自分の心の中の奥底を見つめてみた。

ぼんやりとだが人の影が見えた。

あれっ？ ……その人影は逃げるように消えていった。俺ってそんなに恥ずかしがり屋さんだったかな？

もう一度、集中してみた。 …… ……見つけた。 …… ……んっ？

さっきの影とは違うような …… ……。今度の影は逃げなかった。俺はその影と同期するように近づいて行った。間違い無い。俺の霊魂だ。 ……捕まえた。肉体を介して認識していた俺の自我をダイレクトに感じることができるようになった。俺の視線から俺の霊魂の影が消えた。俺の霊魂と自我が同期して同じものを見る事ができるようになった。

自分の霊魂と同期する事ができた俺は、次にこの肉体という殻から霊魂を解放させる事に挑戦した。 …… ……自分であつけないほど簡単に俺は自分の肉体から抜け出ることができた。

そつだ。この感覚だ。死んだ後に地界で彷徨っていた時の感覚が蘇った。俺の側に立っていた霊奈がちょっと驚きながらも笑顔を見せていた。後ろを振り向くと椅子に座った俺がいた。目を閉じて身動き一つしない。

霊奈が俺に話し掛けた。俺というのは霊魂の方の俺だ。

「真生。やつぱり筋が良いわね」

「一回、死んでいるからかな。いや、三年前にも一度死にかけているからな」

「三年前に死にかけたって？」

「こつちの世界に来る時に渡った川があっただろう。あそこで釣りをしている川に落ちたんだよ。気がつくやうに川岸に寝かされていた。心臓も止まっていたみたいだけど、近くにいた人が人工呼吸をしてくれて生き返ったらしいんだ」

「ふん、そうなの。 ……心臓が止まっていたのなら、あんたの霊魂はその時にも一旦は肉体から離れたのかもしれないわね。そうす

ると本当に死んだ時も入れると過去に二回、靈魂が離脱を経験しているから、確かに慣れているのかもね」

「あんまり、そんなことに慣れたくはないな。せつかく生き返ったんだからしばらくは死にたくはないよ」

「死なないわよ」

「本当に？」

「……わ、私はエンマじゃないんだから、私が保障できるわけないじゃない。でも、………もう、死なない」

「………？」

「………いいから、練習を続けるわよ！ それじゃあ肉体に戻って見て」

時々、意味が分からないことを言いやがる。まあそれはそれとして靈魂を肉体に戻そう。

俺の靈魂はあつさりと肉体と一体化することができた。椅子に座っていた俺は目を開けて立ち上がった。

「うん。上出来ね。でも試験の時には何があるか分からないから何回も練習をしておくこと」

「でもさ、そもそもソウルハンターの試験を受けに来る奴は前提条件として幽体離脱ができるはずだよな。それができないとそもそも実技が通らないんだからさ……。そうすると実技試験はどこが難しいんだ？」

「一番多いミスが制限時間まで離脱できないことね。やっぱり靈魂と肉体を分離させることは危険なことだから本能的に肉体がその靈魂を戻そうとするのよ。また試験中という特別な緊張感がそれを強めることもあるから、普段はできていても試験中には一定時間になると靈魂が肉体に強制的に戻されてしまうってことが多いみたいね」

「なるほど。そうなのか」

「靈魂というのは人間の精神的活動を司っているものだから、やっぱりメンタルな影響を直接に強く受けるものなの。ソウルハンターになるには強い精神力も必要ね」

霊奈が強い精神力を持っていることは否定できない。これだけ俺に罵詈雑言を浴びせても平然としているんだからな。……………でも、それに耐えている俺もけっこう強い精神力を持っているんじゃないか？

第四章 ソウルハンター

俺が獄界に来て三か月が過ぎようとしていた。その間、月曜から金曜日までは家に帰ると霊奈から借りた参考書を隅から隅まで読んだ。高校の受験勉強の時でもこんなに勉強をしたことはなかった。でも霊魂科学や時空理論といった、地界ではテレビ特番のネタではない分野は読んでいて面白かったし、オタク心をくすぐる内容だったから、その内容は脳内の整理棚にどんどん蓄積されていった。

また土日は霊奈につき合ってもらって実技を練習した。幽体離脱はほぼ完璧に行えるようになった。霊魂になった時の移動方法とか普段から霊魂を見られるように裸眼の構造を変える事とかも難なくマスターできた。

一方、自分の情熱をほとんどソウルハンター試験対策に使っていたから、学校の勉強の方はぎりぎり落第しない程度の低空飛行を続けていた。赤点を取らなかつたことは奇跡に近い。

そして、ソウルハンター第一次試験の日がやって来た。試験は、都心にある大学のキャンパス内で行われることになっていた。

幽奈さんの愛情が詰まつた昨日の夕食のビフテキとトンカツに若干胃がもたれながらも、筆記と実技の両方の試験結果に確かな手応えを感じることができた。地界での高校のテストでは虚脱感と失望感しか感じなかつたからな。

俺は、二週間後には一次試験の合格通知を受け取つた。妖奈ちゃんも祝賀会をしようという提案してくれたが、最終的な結果が出てからにしてほしいと言って断つた。

第二次試験はソウルハンターの業務を実際に行う実技演習であった。試験官から指名された地界の霊魂を制限時間内に地獄まで送り

届けることが要件であった。

靈魂管理庁の会議室に集められた約百人の第一次試験合格者一人一人に裏返された書類が手渡された。全員に配り終わると試験官はマイクを持って話し始めた。

「スタートという合図から三時間以内に各自に配付した死亡予定レポートに記載された地界の靈魂を地獄まで案内すること。では、……スタート！」

みんなが一斉に書類をめくった。

嘘だろう。どうしてこんなことに？ 運命の悪戯なのか？ それともそういうことにも動じることなく任務を遂行できるかどうかを試されているのか？

みんなが一斉に会議室を出て行ったが、俺はしばらく椅子から立つことができなかった。

「どうした。気分でも悪いのか？」

試験官が心配して俺に声を掛けてくれた。俺は相当、青白い顔をしていたのだろう。実際、気分は最悪だったからな。

「いえ、……………大丈夫です」

俺はふらつきながら会議室を出て行った。

俺はもう一度、死亡予定レポートをじっくりと眺めた。いくら見てもそこに記載されていた文字が変わることはなかった。

住所、氏名、年齢、家族の名前により特定されていた人物、俺が地獄に案内すべき人物は、……………俺の親父だった。

死因欄には「脳内出血」とあった。確かに親父は血圧が高いつて言っていた。もっとも親父の血圧を上げていたのは、高校二年生にもなつて、まったく受験勉強もしていなかった俺かもしれない。俺はこの試験を放棄しようかと一瞬考えた。……しかし、エンマは人の死亡を決めているんじゃない。その死亡を確実に予想しているだけだ。これも動かすことのできない運命なのだ。

親父はエンマの死亡予想レポートどおりに死ぬ。そして、俺が親父の靈魂を地獄につれて行かなくても、誰か他のソウルハンターが

地獄に連れて行くだけだ。

それなら俺が親父を地獄に案内してやろう。獄界で生き返って生活していることとか、地獄に着くまでにはちよつとは話もできるだろう。

そうだ。俺が親父の死神になつてやるんだ。

靈魂管理庁を出た俺は用意されていた靈魂搬送用の車　ニア・スクーターを持たない受験生のために靈魂管理庁が用意した運転手付きの車だ　に乗つて第三百三十三支部に行った。

それにしても無口な運転手だ。でもそのお陰で色々と考えることができた。俺が獄界でしつかりと生きることが親父への供養になるはずだ。……………そうだ。運命に逆らうことはできない。ならばその運命に向き合つて前に進むしかないんだ。

第三百三十三支部に着いた俺はそこで幽体離脱をした。靈魂飛行術を修得した俺はトランスポイントまでひとつ飛びして地界に行った。…………いや、やっぱり「戻つた」と言いたい。

獄界に来てまだ三か月ほどしか経っていないのに見慣れた風景が懐かしく思えてくる。

俺は親父の死亡予定レポートの内容を思い出してみた。死亡場所は家の近くの救急病院になっていた。そう、俺も事故後に運ばれたあの病院だ。

俺は救急病院まで空を飛んで行つた。

救急病院に着いて救急措置室に行つてみたが誰もいなかった。

次に病室を順番に回つてみた。

いた！　四階の病室のベッドに、人工呼吸器と心電図測定機器を付けた親父が横たわっていた。ベッドの枕元ではお袋と美咲が目をつむらしながら丸椅子に座つて父親の顔を見つめていた。既に救急措置は終わつて、後は天命を待つという状況なのだろう。看護師が一人いたが特に何もせず心電図の波形を注視しているだけだった。

俺は病室でお袋と美咲の後ろに立つた。お袋と美咲の顔を見るの

が辛かった。

それにしても俺が死んでからまだ三か月しか経っていないのに今度は親父も死んでしまうなんて、……お袋と美咲の気持ちを考えると胸が痛んだ。

ちくしょう！ なんとかならないのか！ ……………ふっ、それができるのならやっているさ。

心電図が刻む電子音がゆっくりになってきた。お袋と美咲が「お父さん！」と叫ぶ。看護師が呼んだ医師が駆けつけたが、一つ注射をしただけで他には何も処置をしなかった。

どんどんと心電図の電子音の間隔が長くなってきた。そして「ピ」と最後に一回鳴った後、停止した。

医師が脈と瞳孔を確認する。

「ご臨終です」

泣き崩れるお袋と美咲。俺も泣いた……つもりだったが、靈魂の俺は涙を流すことはできなかった。俺は息絶えた親父の肉体から靈魂が出て来るのを待った。

何を話してやろうか。獄界で第二の人生を始めていることを話すと親父はどんな顔をするんだろう。まさか死神に挑戦しているなんて思ってもいらないだろうな。

などと考えている間も親父の靈魂は鼓動を止めた肉体から出て来なかった。

おかしい。どうなっているんだ？

ふと電子音が聞こえた。最初は一回だけ鳴った。また一回、……また一回、……次第にテンポが上がってきた。……音の発信源は心電図測定機器だった。心電図に若干だが波形が蘇っていた。

医師が慌てて聴診器を親父の胸に当てた。人工呼吸器から泡が出始めていた。心電図の電子音は確実にテンポを速めてきている。

「こ、これは？ 信じられない」

医師も事態が飲み込めないようだ。俺もそうだ。既に死亡予定時刻を経過している。

親父は死ななかつた。エンマの予想が外れた。

これで不合格ならそれでもいい。俺はソウルハンターの認定試験のことなんか忘れて、心の中で万歳三唱をした。

お袋と美咲の祈りがきつと神様に届いたのに違いない。本当に地獄はあつたんだから、どっかに天国もあつて神様が願いを叶えてくれただろう。

俺は獄界に戻って靈魂管理庁の試験官に事情を説明した。

「君もか」

試験官は憔悴しきつた顔で答えただけだつた。

どうやらエンマの死亡予想が外れたのは親父だけではなく、受験生が案内する予定だつた何人かの試験対象者は死亡予定時間に死ななかつたようだ。靈魂管理庁はてんやわんやの大騒ぎだつた。

とりあえず試験は延期となつた。

俺が靈魂管理庁一階のロビーのソファに呆然と座っていると、ゴスロリ調のドレスを着た靈奈がやって来た。どうやら、このドレスはいくつかあるソウルハンターの制服の一つのようだ。

靈奈は俺の隣に座つて、珍しく優しい顔をして話し掛けてくれた。

「真生、聞いたよ。試験対象者はあんたのお父様だつたんだね」

「ああ、……でも、予想が外れて正直嬉しいよ」

「そう、……そうだね。……良かったね」

「ああ、……ところで靈奈。エンマの誤作動の原因は分かつたのか？」

「まだみたいね。もちろん、エンマも神ではないから、何百億回に一回くらいの確率では予想がはずれることはあつたけど、今回みたいに何十人も同時にはずれるなんてことは初めてね」

「二千年も経つて少々ガタがきたのかな？」

「ハードの交換は二十年ですべての部品が新品になるように毎年計画的にされているわ。私が職員から聞いた噂ではエンマ本体のプログラムに古いアクセス痕が見つかったらしいの。それが影響してい

るんじゃないかって言われているみたい」

「誰かがエンマのプログラムを操作してバグを起こしたってことか？」

「そこまではまだ分かっていないみたい。分かったとしても私みたいな下っ端でフリーのソウルハンターに教えてくれるわけではないからね」

「そうか」

「それよりも、これが民主改革連合にとって強力な追い風になることは確かだね」

 靈奈の予想どおり、エンマの誤作動は野党からの恰好の追及材料になった。神聖自由党の長期独裁政権の緩んだ体質が今回の誤作動を引き起こしたと言って、鬼崎総理は連日厳しい答弁を強いられていた。龍岳さんも今まで以上に帰りが遅くなり、何日も家に帰って来ないこともあった。

 一方、地界の俺の親父は奇跡的な回復をみせて、左足が若干不自由になっただけで済んだ。今まで勤務していた会社も続けることができるみたいだ。

 約二週間後、延期されていたソウルハンターの第二次試験が実施された。

 今度の試験対象者は日本ではなくアメリカの死亡者だった。英語を話す自信はなかったが、これもソウルハンターの必須能力である「意思伝達プロトコル」-意思伝達に限定されたテレパシーのような能力のことだ-を修得した俺は、何語だってノープロブレムだぜ。地界でも早くこれを開発してやったら外国語の授業で悩む学生の救世主になれるだろうに。

 死亡者は御歳九十五歳の老婆で、自宅で大勢の子や孫に看取られながらの大往生だった。こんなシチュエーションなら気が楽だ。

 しかし、この婆さん、話し好きで、俺が地獄に連れて行く間、ずっと子供の頃の思い出だとか、既に死んでいる爺さんとのなれそめ

とか、子供達についての愚痴だとかを延々としゃべっていた。俺も適当に相槌を打ちながら、無事、婆さんを地獄に送り届けた。

俺はソウルハンターになった。

靈魂管理庁でソウルハンターの認定証書を受領して来た日の夜。

俺の合格祝賀会と銘打って、家でお祝いの夕食会を開いてくれた。龍岳さんも今夜は一旦このためだけに帰宅してくれていた。深夜にまた出掛けるようだ。

「では、真生君の認定試験合格を祝して乾杯！」

「かんぱ〜い！」

幽奈さん手作りのディナーを前にジュースで乾杯をした。

「でも、真生、頑張ったよね。こんなに短期間で合格できるなんて、ちよつとは見直したわよ」

「なんか靈奈に初めて褒めてもらった気がするな」

「何よ……。私は別にツンデレじゃないんだからね」

そう言っているだけで十分ツンデレだと思っただが。

「そうだ。真生兄ちゃん。今度の日曜日は妖奈もお仕事お休みだから一緒に出かけしようよ。真生兄ちゃんのお祝いのプレゼントも買ってあげる」

いや、嬉しいけど、アイドルと二人きりで買い物って色々と問題があるだろう。でも妖奈ちゃんとお出掛けするのも悪くない。

そうだ。靈奈を巻き込もう。

「靈奈。靈奈も一緒に行かないか？」

「えっ、あ、あたしも？」

「そうだよ。妖奈ちゃんと二人きりだと変な誤解をする奴もいるからな」

「何よ、それ！ 私のこと？」

「妖奈ちゃんのアンの子達だよ」

まあ、お前もそうだけどな。

「靈奈、日曜日はソウルハンターの仕事を休んでも良いんだろう？」

「一緒に行こうぜ」

「ま、まあ、真生のお祝いを兼ねてだから行ってあげても良いわよ」
「おう、それじゃ行こうぜ。……あっ、そうだ。せっかくだから、幽奈さんも一緒にどうですか？」

「私は家のことがありますが……」

「幽奈。幽奈もたまには外にお出掛けしたら」

「そうだよ。妖奈が幽奈と一緒ににお出掛けしたのって、もう憶えていないくらい前のような気がするし」

「いつも家事をしてくれている幽奈さんに、霊奈と妖奈ちゃんもやっぱり感謝をしているんだろうな。俺の提案に二人とも乗ってきてくれた。」

「でも……」

「幽奈、みんながせっかく言ってくれているんだから行っておいで。俺はここしばらくは帰日も遅くなるはずだから食事の用意はしなくて良い」

「お父様がそう言うてくださるのなら……」

「やった〜！ 姉妹みんなでお出掛けなんで本当に久しぶりだね」

妖奈ちゃんも本当に嬉しそうだった。

「真生君。日曜日は娘達を頼む」

「いえ、頼むと言われても……」

「君が来てくれてから、何だか龍真がいた時のように家の中が明るくなったような気がする」

「そんな……」

「ところで、真生君。俺からも一つお願いがあるのだが訊いてくれないか？」

「はい？ 何でしょう？」

「俺と一緒に党本部に来てもらいたい」

「はあ？」

「ソウルハンターになると、未成年者でも選挙権や被選挙権が付与されることは知っているだろう」

「はい」

「靈魂や地獄の管理が獄界政府の第一の責務だ。その靈魂の管理に欠かすことができない職業であるソウルハンターは、例え未成年者であっても獄界政体の構成員たり得るといえるわけだ。つまり、真生君もこの世界のことについて、同年代の人よりも一足先に考えなければならなくなったということだよ。だからその第一歩として、我が党を案内しようと思ってね」

その週の土曜日の朝。

俺は龍岳さんがいつも出勤に使用している黒塗りの高級車に乗せてもらって、龍岳さんと一緒に神聖自由党本部に向かっていった。

霊奈が言っていたが、龍岳さんが乗っている車は暗殺防止のため、窓は防弾ガラス、ボディも特殊な装甲が施されているらしい。また、運転席と後部座席の間には透明なアクリル板のような仕切りがされていた。それだけ危険な目に遭っているということなんだろう。

いつもどおり羽織袴姿の龍岳さんは、両足の間に立てているステッキに両手を乗せて、しばらく瞑想をしているかのように目を閉じて無言でいたが、ふいに目を開けると俺に話し掛けてきた。

「真生君。政治家に必要なものは何だと思う？」

いきなり高尚な話題だな。今まで俺は政治なんてまったく興味がなかったから、さっぱり分からない。

「うーん、…………… 国家の将来を見据える大局的な見方ができるところとかですか？」

「それは大政治家になるためには理想的な能力だね。しかし、その前に今の民主主義の世界で政治家が政治家たり得るために必要なことがある。何だか分かるかね？」

「…………… 分かりません」

「選挙に勝つことだよ。政治家も落選すればその時から只の人だ」「えらく現実的な答えなんですね」

「いくら理想論を熱く語っても、国民の支持を得られなければ、そ

れを政治に反映させることはできない。それが民主主義なのだ」

「でも、国民の支持を得るために、先のことを考えないで目先の利益になることだけを言っていたら、将来のことが不安になりますよね」

「今の野党の連中が言っていることはそういうことなのだ。我が神聖自由党は、民主主義政権に変わる以前からずっとこの国を支えてきた。エンマを適正に管理し独裁政権を生むことなくだ。しかし今、国民の意識は厳しくなってきた。景気もなかなか向上せず、雇用状況も好転しない。今の政治ではない新しい政治に変われば、この停滞した状況も一変するのではないかという期待が高まっている。国民は変革を求めているんだよ。それは長年政権の座にあった神聖自由党の危機なのだ」

「そんなに危ないんですか？」

「世論調査の結果も相当厳しい。このような時に身内で争っている場合ではないのだ」

そう言うつと龍岳さんは目を閉じて深く考え込むように無言になった。俺の知らない所で繰り返されている闇の騎士達による派閥抗争のことなんだろうか？

そんなことを考えているうちに、車は都心にある神聖自由党本部に着いた。

車を降りると龍岳さんは、たちまち記者とカメラマンに取り囲まれてしまった。ノーネクタイのシャツにジャケットを羽織っただけの俺は、どうやら龍岳さんのお付きの人としか認識されなかったようので、記者達にもみくちやにされることはなかった。

記者達は、龍岳さんが「私の方から特に話すことは無い」と言っているにもかかわらず、エンマの誤作動とその責任を党としてどう取るかについて、しつこいほど質問を繰り返していた。

しかし、本部の建物の中には記者は入れないようで、龍岳さんが玄関ドアに入る前に取り囲んでいた記者達は解散して、次のターゲットを迎えるために再度、駐車場の方に移動して行った。

党本部に入った龍岳さんを記者達に代わって待ちかまえていたのは、同僚議員や職員からの挨拶の嵐だった。龍岳さんはエントランスホールにいた人のほとんどから挨拶をされていた。やはり相当な実力者のようだ。

エレベーターで三十五階まで昇り「副幹事長室」という金ぴかの小さな看板が掛かった部屋に入ると、部屋の中にいた秘書らしき男女が一斉に立ち上がって龍岳さんを出迎えた。

「お早うございます」
「お早う」

龍岳さんは威厳を保ったまま、しかし偉ぶっている感じではなく秘書達に挨拶を返した。

龍岳さんは俺を側に呼んで秘書達に俺を紹介した。

「諸君。これは僕の親戚の子で永久真生と言う。今年度のソウルハインター試験に合格したばかりだ。これからちよくちよく僕の仕事の手伝いをやってもらおうかと思っっている」

えっ？ そんな事は聞いてないぞ。ちよっと党本部を見学について言われたはずなんだが……。

しかし、そんな反論を言える状況では既になかった。秘書の方々が俺の挨拶を待っていた。

「あ、あの永久真生と言います。よろしくお願いします」

女性二人、男性二人の計四名の秘書に対して俺は頭を下げた。秘書達も深々と頭を下げた。

「ついて来たまえ」

俺は龍岳さんについて奥の部屋に入った。ふかふかの絨毯が敷かれた上には超豪華な執務机と応接セット、そして十人くらいが打ち合わせができる円卓と椅子があった。

龍岳さんが執務机に座ると同時に、一人の女性秘書が部屋に入ってきた。栗色の髪をアップにして細身の眼鏡を掛けており、しわ一つ無いスーツをバリツと着こなしたキャリアアウーマンを絵に描いたような女性だった。彼女が龍岳さんの執務機の近くに立つと龍岳さ

んは俺に近くに来るように呼んだ。

俺が近くに行くとは意外とその女性は若いことが分かった。

「真生君。紹介しよう。僕の政策担当秘書の恩田沙奇君だ」おんたさき

「よろしくお願いいたします。永久様」

一瞬口ポットかと思っただくらい感情が乏しい表情と声だ。

「あの、様付けは遠慮しときます。それと龍岳さんも真生と名前で呼んでいるので真生で良いです」

「分かりました。それで先生。真生さんにはこれから先生のお手伝いをしていただくということでしたが、具体的にはどのようなことを？」

「いやいや、まだ何か具体的に考えているわけではない。ソウルハインターになったとはいえ真生君はまだ高校生だから、たまに来てもらって色々なことを少しずつ経験してもらおうと思っている」

「分かりました」

「それより総理は今、ご在席かな？」

沙奇さんは手に持った手帳大の情報端末のような機器を操作して画面を確認していた。

「午前十時にはここをお発ちになる予定です。それまでは執務室にいらつしゃいます」

「そうか、それではすぐにアポを入れてくれないか？」

「ご用件は？」

「世間話とでも伝えてくれ」

そんな用件で総理が会ってくれるのか？

しかし、三分後、沙奇さんがやって来てアポが取れたと告げた。

「真生君もついて来たまえ」

「えっ、……俺も一緒に行って良いんですか？」

「かまわん」

龍岳さんはステッキをつきながら部屋から出て行った。

俺も龍岳さんの後に続いて副幹事長室を出て、同じフロアにある総理大臣、つまり政権与党である神聖自由党総裁の執務室まで、や

はり分厚い絨毯が敷かれた廊下を歩いて行った。

総裁の執務室は龍岳さんの執務室の倍の大きさがあった。鬼崎総裁は応接セツトに座ってお茶を飲みながら大福餅を食べていた。テレビでの印象どおり、本当にその辺にいそいな只のおっさんだった。「総理。お忙しいところ申し訳ありません」

いや、全然忙しそうに見えないのだが。

「いやいや、御上さんとはいつでもお話をさせていただきますよ。まあ、どうぞ」

龍岳さんと俺は鬼崎総裁に勧められたソファに座った。

「総理。今日は僕の親戚の子と一緒に来ていますので紹介させていただきます。永久真生と言いまして、つい先日、ソウルハンターに認定されたばかりです」

「あ、あの永久真生といいます。よろしくお願いします」

俺は立ち上がって総理大臣にお辞儀をした。……やっぱり緊張する。

「ほう、見たところ、まだお若いようだが、ソウルハンターになれるとは大したものだな」

「うちの次女の霊奈と同じ高校二年生ですが、これから僕の仕事を少しずつ手伝ってもらおうかと思っております。どうかお見知りおきをお願いします」

「ほう。それでは御上副幹事長の後継者候補というところですかな？」

「そうですね。龍真が死んで、はや三年。僕もまだまだ現役で国のために働く所存でありますが、いかんせん歳を取ることだけは停めることができませんからな」

「なるほど。龍真君が亡くなられてもう三年ですか。早いものですか」

「まったくです。しかし、三年待った甲斐があったというものです」「ほう、どういことですかな？」

「真生君は龍真の生まれ変わりなのですよ」

龍岳さんは俺をつれて総裁執務室を出た。

「いったい何だったんだ？ 鬼崎総理にわざわざ俺が龍真さんの生まれ変わりだと伝えに来たみたいだが……。この世間話に何の意味があったんだ？」

「真生君」

「はい」

自分の執務室に戻りながら龍岳さんは俺に語り掛けてきた。

「これから君の迷惑にならない程度に、君には僕の手伝いをしてもらおうかと思っている。君が政治に対して適性を持っているかどうかを確認したい。……良いかな？」

「龍岳さんには言葉では言い表せないくらいお世話になっていますから、俺も何か恩返しをしたいと思っっていたんです。俺にできることであれば何でも言っってください」

「ありがとう。それでは早速、頼みを一つ聞いて欲しいのだが？」

「何でしょう？」

「今日、これから沙奇君と一緒に僕の選挙区にある後援会に行ってくれないか？」

「はあ？」

「僕の後援会の集会に出てくれたまえ」

「俺がですか？」

「そうだ」

「俺が出て何をすれば良いんですか？」

「真生君のしたいようにすれば良い。真生君がどんなことをしようとかまわん」

「えっ？」

「沙奇君は、さっき会った時に分かったと思うが、秘書として非常に優秀なのだが真面目すぎていかん。君と一緒に行ってくれると面白い事になりそうだ」

面白い事って、そんなことで俺に大事な後援会の集会を任せていいのか？

「僕はこれから他の派閥との代表幹事会議に出なければならぬのだ。頼んで良いかな？」

「まあ、龍岳さんがやれというのであればやりますけど、どうなってもしりませんよ」

「かまわん。責任は僕が取る」

俺は沙奇さんとタクシーに乗ってエンマシティ第五十二街区に向かった。ここは龍岳さんの選挙区で、龍岳さんの家がある住宅街を含むエンマシティの郊外に当たる地区だった。

龍岳さんは選挙区選挙で毎回トップ当選を果たしているようだが、党の副幹事長という職業柄、あまり選挙区の方に顔を見せることができないようで、沙奇さんが龍岳さんに代わり定期的に選挙区に向いて国会での龍岳さんの活動報告をしており、今日がその日だったのだ。

地元の後援会事務所に着くと、四・五人の後援会幹部が出迎えてくれた。

後援会事務所は龍岳さんの家に近い商店街の一角にあるプレハブ造りの建物であった。引き戸を入った事務所の一階は広い集会所のようになっており、支持者らしき人達が三十名くらいパイプ椅子に座って待っていた。

そんな中、沙奇さんは演台に立ち、龍岳さんが党務で来られないことをまずお詫びした上で、現在の国会の状況等をしゃべり出した。言語明瞭だったが抑揚の少ない話し方は眠気を誘うし、政治の事に詳しくない俺はまったく意味不明だった。

よく見ると沙奇さんの話を聞いている支持者の人達も欠伸をしたり居眠りをしている人もいた。やっぱり龍岳さん本人が来ないと盛り上がらないよな。

沙奇さんの話が終わると、支持者の人達は一応、お義理的な拍手を送って、集会は三々五々解散していった。

後には後援会の幹部達だけが残った。

丁度、昼時になって、俺が沙奇さんと後援会幹部の人達と一緒に
仕出し弁当を食べていると、みんなが俺に話し掛けてきた。

「真生君は御上先生のご親戚とのことだが、これから先生の手伝い
をされるのか？」

「はい。少しずつお手伝いをさせていただけようかと思っています」

「先生も三年前に龍真君を亡くされてから何となく元気がなかった
けど、噂に聞くと真生君が家に来てからはすっかりと元気になられ
たというじゃないですか」

「あつ、いえ。まあ、俺、いや、僕は何もしていませんけどね」

「先生は本当に真生君を後継者にしようと考えているんだろうね」

「でも、僕にできるでしょうか？　今まで政治なんて興味もなかつ
たんですから」

後援会の人達は顔を見合わせながら一斉に大笑いをした。

「はははは。真生君は正直者ですな。後継者候補が政治に興味がな
かったなんて」

「でも、本当のことですから」

「確かに若者の政治への関心はどんどん薄れるばかりだ。これは真
生君の責任じゃなくて、我々大人の責任なんだろうね。真生君も政
治に興味を持ってもらって、同年代の若者に政治に積極的に参加す
るようにアピールしてもらいたいよ」

「あつ、はい。……ところで話は変わりますが、皆さんは龍真さ
んとお会いになったことはあるんですか？」

「もちろんだよ。龍真君は先生の後継者だったからね。しかし、あ
の好青年が交通事故で死ぬなんてねえ」

「あの、皆さんはその交通事故のことはご存じなんですか？　龍岳
さんや娘さん達にはなかなか聞きづらくて」

「エンマシテイの海岸沿いの高速道路を時速二百キロでぶっ飛ばし
ていて、ハンドル操作を誤ってガードレールを突き破り海に車ごと
ダイブしたらしい。車は海底から発見されたが、龍真君の遺体は結
局、見つからなかったそうだよ」

遺体が行方不明？ そんな話は初めて聞いたな。

「龍真さんってそんなに車を飛ばす人だったんですかね？」

「龍真さんはそんな人ではありません！」

俺の隣に座ってこれまで黙って俺達の話聞いていた沙奇さんが大きな声を出した。沙奇さんもこんなに感情のこもった声が出せるんだ。でも、どうしてそんなに感情的になっているんだ？

「あゝ、それより真生君。先生の後継者候補になるには演説も巧くならなくてはな」

「はあ？」

何か強引に話題を変えられたみたいだが？ 沙奇さんを見てみると俯いて黙っているだけだった。

「どうだい。ここでちょっと練習してみるかい？ ここにいるのは昔からの先生の支持者だから少々変なことを言っても大丈夫だよ」「さつきも言いましたけど、僕はこれまで政治に興味がなくて何をしゃべったら良いのか見当もつきません。まだ全然無理ですよ」

「まあまあ、内容はともかく度胸を付けるための練習にしてみれば良いじゃないですか」

昼間から若干お酒も入っている後援会幹部の人達に睨し立てられて、結局、俺は演説の練習をすることになった。

演台の上に立ち、電源の入っていないマイクを持って、俺は何を話そうかと考えた。

「え」と

すると俺の頭の中に原稿用紙が浮かんできた。……これを読めというのか？ 誰だか知らないが俺が読むべき原稿を準備してくれていたようだ。

「皆さん、つい先日、エンマが誤作動を起こしました。野党の連中は、これを政府の管理怠慢だと追及してきています。では、野党の連中はエンマの管理ができるんでしょうか？ いいえ、できません。自分が遊び方を知らない玩具なのに、自分も遊びたいと思って、その玩具を寄越せと要求しているのにすぎないんです。しかし、エン

マは玩具ではありません。自分が手に入れてから遊び方を学ぶような時間なんて無いのです」

俺の口からは次々と言葉が飛び出してきた。自分が話している内容は理解できる内容だったが、それを俺の頭の中で論理的に組み立ててくれているのは俺じゃない誰かのような気がした。そして俺自身が演説をしているうちに熱くなってきたことに気がついた。人前でこんなに熱く語ったことなんて初めてだったが、……けっこう気持ちいいかも。

「神聖自由党が政権を失う時はこの国が滅びる時です！ 絶対そんなことにはさせません！」

何故だか会場からざわめきが起こった。驚いて左右の人と顔を見合わせている人もいた。

「次回の選挙でも我々は一致団結して頑張りましょう。……以上で終わります」

一斉に拍手が起こった。みんなが立ち上がって、俺に握手を求めてきた。

「いやあ、驚いた。とても初めてとは思えない。何だか感動してしまっただよ」

「そんな、大袈裟ですよ」

「いやいや、本当に。それに龍真君がよく使っていたフレーズを最後に持つてくるなんて憎いねえ」

「えっ？ ……龍真さんが使っていたフレーズって？」

「最後に言った『神聖自由党が政権を失う時はこの国が滅びる時です』ってところだよ」

「そうなんですか？ 初めて聞きました」

「龍真君のフレーズをパクッたんじゃないのかい？」

「いいえ、僕の口が勝手にしゃべったというか、台詞がすらすらと出てきたんです」

「それが本当ならびっくりだな。こりゃあ、真生君が龍真君の生まれ変わりなのかもしれないという噂は本当なのかもねえ」

その後は俺が龍真さんの生まれ変わりではないかということ話が盛り上がってしまった。

「いやあ、真生君が先生の後継者になるんだったら俺は真生君を応援するぜ」

「おう、俺もだ。先生の後を継げるのは龍真君しかいないと思っていたから、龍真君が死んで俺達のモチベーションもいまいち盛り上がらなかったけど、こりゃ、もう一度、盛り上がざるを得ないだろう」

何だか後援会幹部の人達からすっかりと龍岳さんの後継者に祭り上げられたみたいだ。時間になって後援会事務所を去る時にも握手責めにあつたあげく、次の来訪日を無理矢理決められてしまった。

帰りのタクシーの中では、沙奇さんの俺を見る目が確かに違っていた。……というか、ずっと見つめられているような気がするんだが。

「あ、あの、沙奇さんも龍真さんはご存じなんですよね？」

「は、はい。私は幽奈さんと同級生だったので、……龍真さんは私の一年後輩でした」

えっ、沙奇さんが幽奈さんと同級生！ 幽奈さんもけっこう年上に見られると思うけど、沙奇さんはもつと年上に見えるぞ。やっぱりキャリアウーマンとしての見掛けがもう何年も仕事をこなしてきたという先入観を植え付けるのかもしれない。

「あの、女性に年齢のことを訊くのは失礼ですが、確か幽奈さんは二十一歳だったと思うんですけど、沙奇さんもそうなんですか？」

「はい。そうです。……老けて見えますか？」

「あっ、いえ。そういう訳ではなくて、龍岳さんの秘書をされているから既に大学を出られていると思っていたんです」

「大学は二年で卒業しました。私は高校生の頃から先生の秘書のよくなことをさせていただいていましたから……」

「それじゃ、龍真さんと一緒に働かれていたんですね？」

「……はい」

龍真さんのことが話題になる時、表情の変化に乏しい沙奇さんの顔が微妙に暗くなるのは俺の気のせいではないはずだ。

その後、しばらく無言でいた沙奇さんは突然、俺の顔に自分の顔を近づけてきて、タクシーの運転手に聞こえないように小さな声で俺の耳元で囁いた。

「真生さん、……後ろの車、私達をつけているみたいですね」

「えっ！」

「振り向かないでください」

俺はさりげなくタクシーのバックミラーを見ると、一台の黒い車がついて来ているが見えた。

「どうしてつけているって分かったんですか？」

俺も沙奇さんの耳元に口を寄せて囁いた。……良い匂いが俺の鼻をくすぐった。

「後援会事務所に向かう時にもついてきました。私達が事務所にいる間は、不審な黒いスーツを着た男が事務所の周りを彷徨っていました。そして、また同じ黒い車が私達の車の後ろを走っているということは、ずっと尾行していると考えることが合理的です」

本当に最小限の言葉で必要十分な情報を伝達することができる人だ。さすが大学を二年で卒業するだけのことはある。

俺がまたバックミラーに視線を向けると一瞬タクシーの運転手と目が合ったが、運転手はすぐに視線をそらせた。どうやら運転手は俺と沙奇さんが顔を近づけてイチヤイチャしていると思ったようだ。その後、バックミラー越しの運転手の視線はあえて二人を見ないよう動いていた。

「どうします？」

「どうもしません。彼らもこんな場所では手を出すことはできませんから」

「沙奇さんも、その、……龍岳さんが狙われていることは知っているんですか？」

「私は御上先生の秘書です。そして、……『獄門の番人』のメンバ

「でもありません」

俺は驚いて沙奇さんの方に顔を向けると、沙奇さんも俺の方に顔を向けたため、鼻と鼻がくつつくほどに至近距離で向かい合うようになってしまった。近くで見る沙奇さんは幽奈さんに勝るとも劣らないくらい美人だった。

一方、沙奇さんは何かに驚いているように目を大きく見開いて俺の顔を見つめていて、何だか俺は照れてしまった。

「あ、あの沙奇さん……」

沙奇さんはふと我に返つたみたいになんと顔を引いた。

「……も、申し訳ありません」

「……あの、俺の顔に何か付いてますか？」

「あつ、いえ、……すみません。なんだか一瞬、龍真さんに見えたものですから……」

沙奇さんは俯きながら小さな声で呟いた。

沙奇さんと龍真さんとの間には何かがあつたんだろうか？ でもそれは、今ここで触れてはいけないような気がした。

第五章 デュアルソウル

初夏の日差しが眩しい日曜日の午前。三姉妹と一緒に買い物に出掛ける約束をしていた日は絶好の行楽日和だった。

俺は玄関前で、霊奈と妖奈ちゃんと一緒に、まだ家の中で支度中の幽奈さんを待っていた。

「ねえねえ、どうかな、真生兄ちゃん？」

妖奈ちゃんは重ね着した原色のTシャツにジーンズのホットパンツを着て、素足にチエック柄のスニーカーを履いていた。

しかし、キャップにサングラスにマスクの三点セットは止めた方が良さそう。それ、どう見てもお忍びファッションの芸能人か、怪しい変態のどちらかにしか見えない。それに本当に芸能人なのだから、周りにそれをアピールしているみたいなものだ。

「余計に目立ちそうな気がするんだが……」

「やっぱり？ 真生兄ちゃんがそう言うのなら止めよ」

「もし妖奈ちゃんだつてばれて、ファンの子が妖奈ちゃんに迫つて来たら、俺が盾になって妖奈ちゃんを守るからさ」

「真生兄ちゃんつて頼りになる」

「ははは、任せなさい！」

「その時のどさくさに紛れて、妖奈に変なことをしないでよね！」

「靈奈の奴、相変わらず俺をロリコンだという前提で話をしゃがる。俺がいつ妖奈ちゃんに手を出したつていうんだ？ ………………出してないよな？」

腕組みをしながら俺を睨みつけている靈奈は、膝丈の上品なノースリーブのワンピースにサマーストールを羽織つて、足元は素足にヒールの付いたストラップサンダルを履いていた。

くそ！ 悔しいけど可愛いじゃないかよ！ 黙っていたらど

こぞのお嬢様にしか見えないんだから少しはしおらしくしているよな。

「な、何よ。ジロジロ見ないでよ。……………何か変？」

「あ、いや。……………似合っているなつて思ったただだよ」

「……………そんなに褒めたつて何の徳にはならないわよ」

「いや、別に徳をしたいから言つたわけじゃないつて……………」

「……………べ、別に良いけど」

褒めているんだから素直に喜べよな、まったく。

「ごめんなさい。お待たせして」

玄関から幽奈さんが出て来た。

薄い水色の着物に藍色の帯。着物と同じ色の日傘を持っていた。

そう言えば外の光の下で幽奈さんを見るのは初めてだ。幽奈さんの白い肌が更に眩しく輝いている。

「いえいえ。幽奈さんのためなら俺は玄関でもどこでも一生待つていますよ。はははは」

「真生さんたら……………」

俺よりも年上なのに少女のように初々しく照れて俯き加減の顔を赤らめる幽奈さん。……………たまらん！ 俺はもう幽奈さんの忠犬とし

て仕えたいくらいだ。尻尾を振りながら幽奈さんに擦り寄って行く妄想が俺の脳内を支配しようとした時、脇腹に激痛が走った。

「ぐわっ」

「真生！ ぐずぐずしてないで行くわよ！」

霊奈の奴〜！ 俺が妄想上映中の時を見計らって肘鉄を喰らわしてきやがる。

俺が幽奈さんに尻尾を振ったら駄目なのか？ …… ひよつとして霊奈の奴、焼き餅を焼いているのかな？ …… いや、霊奈に限ってはそれは無いな。大事なお姉さんである幽奈さんに下心を持って接するなということなんだろう。

俺達はタクシーに乗って都心に向かった。着いた先は二十一番街という地界でいう銀座のようなお洒落な高級商店街だった。

ウィンドウショッピングをしている三姉妹は、本当の芸能人である妖奈ちゃんはもちろん、幽奈さんや霊奈も何かキラキラ光るオーラに包まれていた。アイドルの妖奈ちゃんに気づく人もいたが、そこは上品な街だ。ドツと寄って来てサインを強請ったりするようなことはなかった。

しかし、俺ってこの三姉妹の何に見られているんだろうな？ この三姉妹のうちの誰かの恋人だと思われていたり……… ってことはないだろうな。俺が両手に持った洋服店や靴店の紙バッグは俺を付き人が荷物持ちくらいにしか見せていないだろう。

荷物持ちには慣れている。もっともそれはお袋と美咲の買い物につきあうことで、エロゲの購入資金となる臨時収入が得られるからやっていただけだ。

でも、……この三姉妹の楽しそうな笑顔を見てみると、それだけでこつちまで嬉しくなってきた、報酬なんて得られなくても荷物くらは俺が持つてやるって格好付けて言いたくなる。だって俺は、妖奈ちゃんの頼れる兄貴であって、幽奈さんの従順な犬であって、霊奈の……下僕だからな。

色々な店を回った後、俺達は高級そうなデパートまでやって来た。
「ねえ、真生兄ちゃん。真生兄ちゃんのお祝いのプレゼントは何が
良い？」

「あつ、そうだ。今日は真生のお祝いを兼ねているんだっけ」

妖奈ちゃんが振ってくれなければ、今日のそもそもの目的を忘却
の彼方に置き去りにしたままだったのか。霊奈の奴は……。

「何でも良いよ」

「駄目だよ。真生兄ちゃんが本当に欲しいものを買ってあげるから。
……あつ、でもお父様からもらった軍資金の範囲内だね」

そうなのだ。今日の買い物はこの日のために龍岳さんがくれたお
小遣いが軍資金であつて、三姉妹が金に糸目を付けずに、いわゆる
セレブ買いをしているわけではなかった。妖奈ちゃんなんか、三千
円のネックレスと二千八百円のイヤリングのどちらを買おうかと三
十分は悩んでいたくらいだ。現役のアイドルなのに。

龍岳さんの地位や職業ならお金に不自由することは無いだろうけ
ど、けつして娘達に贅沢をさせているわけではなく、霊奈や妖奈ち
ゃんが自分で稼いだお金も幽奈さんに管理をさせて龍岳さんの許可
なしには自由に使えないようにしているみたいだ。それでも娘達か
ら不満が出ないということは、父親として龍岳さんがいかに娘達に
信頼されているかを如実に表していると言つていいだろう。

「そうだなあ。何にするかなあ？」

まさかエロゲとかお宝ディスクなどと言えるわけもないしな
あ。

「真生もお父様の後援会事務所にこれからも行く事があるんでしょ
う。だったらスーツを揃えてみれば」

「でもスーツなんて買ったことないからな」

「私が選んであげるわよ」

「えっ、霊奈が」

「何よ。私に見立てじゃ気に入らないっていうの？」

「いや、そう言う訳じゃなくて……。それじゃ、お願いするよ」

「そうそう。人にものを頼む時にはそういう態度じゃないとね」

頼んでないから。スーツを買ったらと言い出したのはお前じやね。

「私は欲しい物は大体買ったけど、幽奈と妖奈はまだ自分の買い物が終わっていないでしょ。私は真生の買い物につき合っているから、その間に二人は自分の買い物を済ませてくれば」

「そうね。そうしましょうか」

幽奈さんはそう言うのと妖奈ちゃんと一緒に別の売り場に去って行った。

一方、俺と霊奈は紳士服売り場にやって来て、色々とスーツを見て回った。……何だかんだ言って、霊奈と二人きりで買い物をするシチュエーションになってしまった。これって知らない人が見たらデートに見えるんじゃないか？

「真生。これなんかどう？」

霊奈がストライプ柄のちよつと渋いスーツを選んだ。

「ちよつと羽織ってみて」

俺は上着を羽織って鏡の前に立ってみた。我ながら意外とい

けているんじゃない？

「うん。真生、ちよつとこつち向いて」

俺が霊奈の方を向くと、霊奈は俺のすぐ前まで近づいて来て、上着のボタンを閉めたり外したりしながら見立てをしていた。

俺の目の前に霊奈の髪があった。良い香りが俺の鼻をくすぐった。

あれっ、霊奈の肩ってこんなに小さかったっけ？ 一緒に住みだしてもう三か月以上経っているのに初めて気がついた。けっこのプロポーションが良いから体格も良いような気がしていたけど……。

霊奈は俺が変な事を考えるとすぐに察知する特殊能力を備えているようだ。霊奈に見とれていた俺の視線と急に上を向いた霊奈の視線とが真正面からぶつかって見つめ合うようになってしまった。

「な、何よ」

「い、いや、ごめん」

「何、謝っているのよ。謝らなければいけないような事をしていたの？」

「ち、違うよ。ちよっと……霊奈に見とれていただけだよ」

霊奈の顔が見る見る赤くなった。

「……ば、馬鹿」

「馬鹿ってことはないだろう。……それより霊奈の見立てはどんなんだよ。これ、似合っているか？」

「えっ、……うん、良いんじゃない」

「それじゃ霊奈の見立てを信じてこれにするよ」

「後で文句を言わないでね」

「言わねえよ。……ありがとうな、霊奈」

「……う、うん」

俺が霊奈と一緒にスーツの会計を済ませていると、幽奈さんが小さな紙袋を提げて紳士服売り場にやって来た。

「真生さん。良いスーツはありましたか？」

「ええ、霊奈に選んでもらいました。幽奈さんは何を買ったんですか？」

「可愛い湯飲みがあったので思わず五人分買ってしまいました」

五人分？ ……ちゃんと俺の分もあるということだよな。今日、家に帰った後、その湯飲みで幽奈さんが入れてくれたお茶を幽奈さんにふうふうしてもらいながら飲むという至福の時が訪れることを期待しよう。

俺がそんな期待に胸を膨らませていたら、妖奈ちゃんが小走りに俺達の側まで近づいて来た。

「霊奈」

「どうしたの、妖奈？」

「水着売り場に行こうよ。ここの水着売り場、今、新作水着がいっぱい出ているみたいだよ」

「水着か……。そうね。そう言えば最近サイズが合わなくなってきたから、ちよつと見てみようかな」

霊奈の奴、まだ成長しているのか？ 特に胸が。

妖奈ちゃんが俺達をデパート三階の水着売り場に案内してくれた。……しかし、ちよつと目の毒だぞ。あんまりキョロキョロしていると、また霊奈に変な誤解を受けてしまいそうだ。

「ねえ、幽奈も水着を買ったら。これなんかどう？」

妖奈ちゃんが手に持っていたのは、一辺が十センチくらいの正三角形の布しかないブラと四十五度の角度で切れ込んでいるパンツのビキニだった。

「私は水着はちよつと……」

幽奈さん、まずはその水着のきわどさに突っ込むべきでしょう。

しかし、この水着を着た幽奈さんは……。

そもそも、いつも着物をきちつと着ている幽奈さんの肌はほとんど見た事が無い。夜、喉が渴いてキツチンに水を飲みに行った時、風呂上がりの幽奈さんに遭遇したことが二回ほどあるが、浴衣から微かに見えた細い腕と素足の白さが今でも目に焼き付いている。

「真生。……真生。どうしたの？」

気がつくつと、霊奈が俺の目の前で手を振っていた。……いかん。

また妄想の世界に入り込んでいたようだ。

「なんかデレ〜としちゃって……。水着売り場は真生には危険だったかな？」

「人を水着ごときで欲情する変質者みたいに言うな！」

「あなた、今の顔して市民プールで徘徊していたら、間違いなく補導されていたわよ」

くそっ！ 俺自身がどんな変態面をしていたのか分からないから反論できないじゃないかよ。でも、超マイクロビキニを着て浜辺で戯れる幽奈さんのプロモーションビデオが頭の中で流れていたから、あちこちのネジが緩んだ顔だったことは確かだろう。

お昼時になると、妖奈ちゃんが番組収録で訪れたことがあるというレストランを予約しているとのことで、大通りから一つ通りを入った裏通りに面したビルの地下にある隠れ家のような店に行った。どうやら芸能人がお忍びでよく来るちよつとリッチな店のようで、これまで俺には縁の無かった場所だ。地界で家族揃って食事したのって回転寿司くらいだったもんな。

食事はフランス料理をベースにした創作料理という感じで和食のテイストも取り入れているようだった。とりあえず隣の霊奈を見ながらナイフとフォークを間違えずに食うことはできた。幽奈さんは味付けについて興味があるようで、時々小さなメモ用紙に何かをメモしたりしていた。明日の夕食には新しいメニューが登場するかもしれないぞ。おそらくこの店の料理より美味いはずだ。

食事が終わり店から出ると、通りは初夏の日差しを和らげるような爽やかな風が通り抜けていた。賑やかな大通りから一つ通りを入っただけなのに人の姿は見えず、何だか閑散としていた。

嫌な予感がする。

通りの角を曲がって俺達の方に歩いて来ている五人の男達が俺の視界に入ってきた。男達は黒のサングラスを掛け、黒いスーツを羽織って白のワイシャツに黒のネクタイを締めていた。反射的に振り向くと、通りの反対側からも同じ格好の男達が五人歩いて来ていた。警戒警報が俺の中で鳴った。しかし、もう遅かった。周りの景色が突然、陽炎のように揺れた。

結界だ！

十人の黒服の男達は一齐に右手から剣を、左手からは丸い盾を出して、通りの両側から俺達を挟み込むようにゆっくりと迫って来た。「何者？」

霊奈が一步前に出て、右手から剣を出して叫んだが返事はなかった。黒服達は終始無言だった。

「幽奈！ 妖奈！ 油断しないで！」

霊奈の言っていることが俺にも理解できた。こいつら、確かに俺

達を殺しに来ていた。その凄まじい殺気は、この俺にだって感じる
ことができた。

幽奈さんは大丈夫か？ 卒倒しているんじゃないかと心配して、
俺の右隣にいた幽奈さんを見ると、幽奈さんはまったく怯えている
ようではなく、持っていた日傘を丁寧な地面に置くと、右手を勢い
よく振り下ろした。幽奈さんの右手には薙刀のような武器が握られ
て、しかもいつの間にか赤いたすきを掛けていた。……どこまでも
姫様仕様の方だ。

それじゃ妖奈ちゃんは……？ 俺の左隣にいた妖奈ちゃんに視線
を移すと、妖奈ちゃんの右手には既にナイフのような短剣が握られ
ていた。

何てこった！ 幽奈さんも妖奈ちゃんも「携帯武器」が使えな
んて！

「幽奈、妖奈。真生を守ってあげて！」

幽奈はそう言うと、ヒールの付いたサンダルを脱ぎ捨て裸足にな
って、通りの一方に居る五人の黒服達に向かって行った。

反対側にいた五人の黒服達は俺と俺の前に立ち塞がっていた幽奈
さんと妖奈ちゃんを取り囲むように迫って来た。

「真生さん、私達の側から離れないでくださいね」

こんな事態でも幽奈さんの口振りは慌てている様子ではなく、い
つもどおり、穏やかな気持ちにさせてくれる。家でも「私の側から
離れないで」なんて言われたいぜ。

五人の黒服達は、ジワジワと包囲網を縮めてきていたが、妖奈ち
ゃんが一瞬の隙を見逃さずに投げたナイフが青い光を放ちながら盾
をかいくぐって一番前に出て来ていた黒服の胸に突き刺さった。そ
の黒服が前屈みになった機を逃さず、滑るように前に出た幽奈さん
が薙刀を払ってそいつにとどめを刺した。

しかし、それで黒服達もこの二人の美少女達も侮れないと悟った
のか、残り四人の黒服達は盾を身体に引きつけて構えながら慎重に
間合いを取ってきた。

「うっ」

幽奈さんが急に胸を押さえて苦しそうに顔を歪めた。

「幽奈！ 大丈夫？」

妖奈ちゃんがすぐに幽奈さんの側に駆け寄った。その隙を突いて黒服の一人が走り寄って来たが、妖奈ちゃんが咄嗟に投げたナイフを慌てて盾で防いで、それ以上は近寄って来なかった。

今の黒服……。苦しそうにしていた幽奈さんではなく、俺に向かつて来ていたように見えた。……。こいつら、俺をターゲットにしているのか？ サングラスに隠れてはつきりとは確認できなかったが、黒服達の視線は、俺の前に立ち塞がっていた幽奈さんや妖奈ちゃんを通り過ぎて、俺に向いているような気がした。

もし、こいつらのターゲットが俺なら、三姉妹は巻き添えを食ったことになる。……。霊奈は大丈夫か？

心配は無用だった。霊奈は既に二人を切り倒して、残り三人の黒服達と対峙していた。しかし多勢に無勢だ。こっちにはまだ四人も残っている。しかも幽奈さんの様子もおかしい。

幽奈さんの様子に気がついた霊奈も敵の隙を突いて俺達と合流した。

「幽奈！ 大丈夫？」

「ええ、……。久しぶりに暴れたからかしら。でも、……。もう平気よ」
幽奈さんは大きく息をした後、しっかりと背を伸ばして薙刀を構えた。

黒服達も七人が一団となって俺達を取り囲んできた。

屈強な黒服達を前にして、幽奈さん、霊奈、妖奈ちゃんが俺を守ってくれるように立ち塞がっていた。

黒服達のうち三人が高くジャンプをして俺達の背後に降り立つと、三人が一斉に俺に襲い掛かって来た。

しかし、霊奈がすばやく回り込んで、俺が三人の黒服に切り刻まれるのを防いでくれると、黒服達は、また素早く合流して、七人がまとまって俺達に迫ってきた。

「靈奈。俺は大丈夫だから思う存分戦え！」

「馬鹿言わないで！ あんた一人守るくらい全然平気よ！」

いや、この状況は全然平気じゃないだろう。それにしても……、こんな俺を、赤の他人の俺をどうして必死で守ってくれるんだ？俺を気にせずに戦ったらもっと有利に戦えたはずだ。どうして？

……理由なんて無いんだろう。この三姉妹はそんな女の子達だつてことは三か月も一緒に暮らして分かっている。そんな三姉妹を傷つかせたくはない。

くそ！ 何で俺だけ何もできないんだよ。ソウルハンターと一緒に「闇の騎士」の訓練もしていたら良かったぜ。

んっ？ 何だ、これは？

俺の体の中から何かが湧き上がってきた。一体何だろう？

「靈奈を虐める奴は許さない」

俺の気持ちがそう言っていた。……………俺の気持ち？ ……違う。

俺の気持ちじゃない。俺の心の中で叫ばれているのに、それは俺じゃない誰かが叫んでいるみたいだった。

俺は、俺は……………。

「みんな、どいてろ」

俺は前に立っていた三姉妹を押し退けて黒服達の前に立った。

「真生。危ないから後ろにいて」

靈奈が俺の肩に手を掛けて言ったが、俺は肩に置かれた靈奈の手を上から包み込むように握って振り向きながら三姉妹を見渡した。

「お前達は俺が守る！」

俺自身がこんなにドスの利いた声が出せるなんて思ってもいなかった。

靈奈達も驚いて立ち尽くしているようだった。

俺は更に数歩、黒服達の前に進んだ。

「貴様らの相手はこの俺だ」

俺は何を言っているんだ？ 勝てるのか、こいつらに？

勝てる！ 俺なら勝てる！ 何故だか分からなかつ

だが、俺の中の俺じゃない誰かがそう保証してくれていた。

俺は、霊奈が剣を出す要領で、一旦、顔の横まで上げた右手を勢いよく振り下ろした。俺の手には、あの黒ローブの男が使っていた鎌のような武器が握られていた。

間髪を入れずに俺は黒服達に突進した。最初の一人は盾を構える隙も与えず、振り下ろした大鎌で身体を縦に切断した。二人目は盾をはじき飛ばして胴体を真横に切断した。俺には黒服達の動きがスローモーションを見ているかのように見えた。どうやら俺自身の動きが速くて、相対的に黒服達の動きが遅く見えているようだ。俺のどこにこんな力があつたんだ？ ……いや、今はそんなことを考えている隙はない。

俺は残った五人の黒服達に向き直って鎌を構えたが、黒服達は示し合わせたように高くジャンプをして俺を飛び越え、霊奈達に襲いかかった。俺の活躍に驚いていた三姉妹は油断をしていたのか武器を構える隙もなく黒服達に剣を喉元に突き付けられてしまった。

「その武器を捨てる。さもなければこの女どもがどうなるか保障できんぞ」

こもつたような声で黒服の一人が脅してきた。

しかし俺は大鎌を捨てることなく近付いて行った。……大丈夫だ。霊奈達に危害を加えることなんてできやしない。この俺の前でな！突進した俺は黒服達が行動を起こす隙を与えず前衛の二人を切り倒した。残りの三人は霊奈達に剣を突き付けながら後退し始めた。

「その子達を離せ！」

俺の怒りは頂点に達していた。それが言葉として吹き出していた。「どうしても離さないか？」

黒服達の表情に恐怖が見て取れた。

「霊奈を虐める奴は許さない」

俺の心の中で叫ばれていた言葉がつい口に出た。その言葉を聞いた霊奈は目を見開いて俺の顔を凝視していた。

しかし、すぐに我に返った霊奈は、自分に剣を突き付けていた黒

服の隙を見てその脇腹に蹴りを入れた。幽奈さんと妖奈ちゃんに剣を突き付けていた二人の黒服が霊奈に蹴られて横にすっ飛んでいく仲間に視線を奪われていた隙を見て、俺はその二人に突進して抵抗する隙も与えず切り倒した。

そして、霊奈に蹴り倒されていた黒服の側に行き、剣を取り上げてから、サングラスを取って胸ぐらを掴んだ。

「お前達はどこの組織の者だ？」

「そんなことを言えるわけがないだろう」

死をも恐れない「闇の騎士」がそんなことを白状するはずはなかった。そいつは舌を噛みきって絶命した。ソウルハンターである俺は目の構造を切り替えて、そいつの靈魂が空に逃げて行くのが確認した。野良靈魂にならないように靈魂管理庁に連絡をしておくべきだな。……いや、エンマならもう予想済みだろう。

三姉妹が俺の側に走り寄って来た。

「真生！ その武器は？」

霊奈が驚いた顔で俺に訊いてきた。

「青龍聖玉大鎌。龍真の持っていた武器ですね」

幽奈さんの顔もいつもより相当青白かった。もう胸は大丈夫なのだろうか？

「真生兄ちゃん、それどこで手に入れたの？」

「いや、別にどこかで買って手に入れたわけじゃないけど……」

「真生。あんたはいつたい……」

結界が融け始めた。俺が念じると大鎌が消えた。幽奈さんも霊奈も妖奈ちゃんもそれぞれの武器を仕舞っていた。

黒服達の死体とともに結界が消えると、辺りは元の閑静な裏通りに戻った。

その日の夜、家に帰って来た龍岳さんに俺達は昼間の出来事を報告した。

「真生君が龍真の青龍聖玉大鎌を……」

「びつくりしちゃった。真生兄ちゃんは本当に龍真お兄様の生まれ変わりなのかも」

「真生君は何か思い当たることは無いかね？」

「戦いの最中に、俺の心の中で俺じゃない誰かが『戦え』とか『自分ならできる』とか言っていたような気がするんです」

「どういうことなの？」

ソファの俺の隣に座っていた霊奈が俺に顔を近づけながら訊いてきた。

「それは俺の方が訊きたいよ」

「お父様。お兄様は三年前に事故で亡くなられたんですよね。でも真生は十七年前に生まれている。生まれ変わることってできるんでしょうか？」

「……分かん。しかし、今のみんなの話を聞くと真生君は龍真の生まれ変わりだと考えざるを得ないが何も証拠があるわけではない。俺ら家族の願望がそう思わせているだけかもしれない」

俺の心の中で響いてきた俺じゃない人の声。あれは龍真さんだったのだろうか？ 龍岳さんの後援会事務所で演説の練習をさせられた時にも、俺じゃない誰かが俺の声を使って演説をしたような感覚だった。俺の中にいる誰かが龍真さんではないかとみんなも俺も思っている。

しかし、何故三年前に死んだ龍真さんの声が俺に聞こえるんだ？ それと俺自身にも信じられない超人的な戦闘能力。あれは俺の肉体の元オーナーである黒ローブの男が有していた能力だったのだろうか？ そしてその黒ローブの男と龍真さんとの関係は？

何も答えは見つからなかった。そして俺にはもう一つ気になることがあった。

「それより今日の黒服達は何故、俺達を襲ってきたんでしょうか？」
「その答えは俺にある。俺が『獄門の番人』の責任者だということ
は、それだけで他のプライベートアーミーからの標的にされている
ということなのだ。その俺の娘達にも何かしらの利用価値を見出せ

ば、当然のごとく刃を向けてくる。だから僕は娘達にも我が身をを守るだけの戦闘能力を身に付けさせた。霊奈に至っては『獄門の番人』でも一・二を争う女性戦士になっている。こんな家にやっかいになっ
っている君も大変だな」

「いや、もう慣れました」

「はははは。それは頼もしい。とにかく、みんな、これからしばらくは気を抜くことのないようにな」

俺は龍岳さんの話を聞きながら、何か釈然としない気持ちになっていた。あの黒服達は三姉妹を襲って来たのではなく俺を狙って来たような気がしてならない。俺が獄界に来てから三か月以上、俺がソウルハンターになるまでは、俺が襲われることはなかったし、三姉妹が俺の知らないところで襲われたということも聞いていない。しかし、俺がソウルハンターになって龍岳さんと一緒に党本部に行つてから、尾行が付いたり殺されかけたりし始めたような気がする。龍岳さんが俺を党本部に連れて行ったことは何か特別な理由があったんじゃないのだろうか？

しかし、その疑問は俺が漠然と感じているだけで、恩義を感じている龍岳さんにそれを問い質すことはできなかった。

俺が自分の部屋でベッドに横たわりながら今日の出来事を思い出しているのとドアがノックされた。

俺がドアを開けると、ロングTシャツ一枚を着て、髪をアップにした霊奈が立っていた。風呂上がりのようにシャンプーの良い香りがしていた。

「ちょっと中に入って良い？」

えっ、風呂上がりに男の部屋に入り込む……。ひよっとして今日のお礼に私の体を……って考えすぎだ。そんなことを考えていたら霊奈に怪しまれるぞ。……って、本当に怪しんでいるし！

「な、なんか変なこと考えたんじゃないの！ 今、何だかすごく身の危険を感じただけだ」

「な、何を言っているのかな。そ、それじゃあ応接間に行くか？」
「……ううん。ここで良い」

霊奈は俺の部屋に入ってベッドの上に腰掛けた。俺も自然にその隣に座った。

「ちよつと、必要以上に近づかないで！ もうちよつとあっちに行つてよ」

へいへい。分かりましたよ。俺はちよつとだけ腰を浮かして二センチほど横に移動しただけだったが、霊奈は何も言わなかった。

「この部屋に家具が入ると、本当にお兄様が生きていた時の頃を思い出す」

霊奈は遠くを見つめるような表情でポツリと呟いた。

「やつぱり、あんたはお兄様の生まれ変わりだったんだ」

「それならさつき話したじゃないか。それを証明することはできないって」

「いいえ、絶対そうよ。あの戦いの最中、あんたは何て言ったか憶えている？」

「さあ、よく憶えていない」

「『霊奈を虐める奴は許さない』って言ったの」

「ああ、そう言えばそんなことを言った気もするな」

「それはお兄様がいつも私に言ってくれていたことなの。……私、こう見えて小さい頃は弱虫で男の子達からいつも虐められていた。

そんな時、お兄様がいつも私を助けに来てくれた。私が泣いていると、いつでも来てくれた……」

霊奈の目からは大粒の涙がこぼれ落ちていた。いつも勝ち気な霊奈しか見たことの無い俺はちよつと戸惑ってしまった。

「……霊奈は龍真さんのことが本当に好きだったんだな」

「そうよ。ちつちやい頃は、私はお兄様のお嫁さんになるのが夢だったから」

それは叶わない夢だな。ちよつと危険な香りもする。……でも霊奈は龍真さんが死んで、龍真さんのお嫁さんになるといふ夢が破れ

だから、ソウルハンターになって、そして龍岳さんの後継者になる
うとしたんじゃないのだろうか？

「ねえ、真生」

そう言うと、靈奈は俺のすぐ側まですり寄って顔を近づけてきた。

「な、何だよ、いったい？」

「あんだ、私に隠していることは無いの？ お兄様のこと何か？」

「何も知らないって」

「そう」

そう言うと、靈奈は悲しい顔をして俯いてしまった。でも、……
体は密着したままなんですけど。

「あ、あのさ、逆に訊くけど、俺と龍真さんの接点って何かなかつ
たのか？」

「一つある」

「何だ？」

「あの第三百三十三支部で会った黒ローブの男。あの男も青龍聖玉
大鎌を出したの。あの黒ローブの男がお兄様と何か関係があったの
かもしれない」

「そうだよな。それしか思いつかないよな。」

「……靈奈。明日、学校が終わった後、第三百三十三支部に行つて
みようぜ」

「あそこに？」

「ああ、もう一度、あの場所を詳しく調べてみれば何か分かるかも
しれないぞ」

「……………そうね。手掛かりがあるとすれば、あそこしかないか」

次の日。

学校から帰ると、制服を着替える時間も惜しんで、俺と靈奈は、
靈奈の運転するエア・スクーターで第三百三十三支部に行った。

プレハブ造りの建物は俺が獄界に初めて来た日からどこも変わつ
たところは無いように見えた。その後、俺はソウルハンター認定試

験の時にこの支部を使用しているし、霊奈も仕事で何度も使用している所だ。

俺と霊奈は建物の外と内を見て回ったが特におかしな所は見当たらなかった。

霊魂管理庁の支部とは主にトランスポイントの近くに設置されている建物で、ソウルハンターが幽体離脱をしている間に、霊魂の抜けた肉体が襲われないように、その肉体を安全に保管しておくための施設であり、そのため、建物自体が強力な結界を張ることができるようになっている。

「つまり、霊奈の霊魂がその肉体を離れている間、この建物が結界を張って敵の侵入を防いでくれていたということなんだよな？」

「結界を通過することができるのは霊魂だけよ。地界から戻って来た私とあんたの霊魂は結界を通過してこの中に入り、そして私の霊魂が自分の肉体に戻って、内側から結界を解除するまでは、肉体を有する者は誰も支部の中に入れなかったはずよ」

「そうすると、あの黒ローブの男はどこから来たんだ？ この周りには身を隠す所なんて無いぞ」

俺と霊奈がポートでこの支部にやって来た時にはこの河川敷には誰もいなかった。支部の建物の周りは堤防の下に広がる河川敷の原っぱで、辺り一面に覆い茂っている草もくるぶし辺りまでの高さしかなかったから、地面に寝転がっていても身を隠すことはできないはずだ。

俺が黒ローブの男に声を掛けられて振り返った時、黒ローブの男は支部の堤防側の扉の前に立っていた。どう考えても支部の中から出て来たと考えの方が合理的だ。

「霊奈。やっぱり、あいつはこの建物の中から出て来たと思えないんだ」

「うん、私もそう思う」

「でも、この建物の中で隠れることができる部屋ってあるのか？」

「一階はこの部屋だけよ。二階には倉庫があるはずだけど」

俺と霊奈は一階の部屋の壁沿いにある内階段で二階に昇ってみた。階段を昇ると、もうそこは一つの大きな部屋であった。しかしその部屋は物置として使用されているみたいで、何に使うのか分からないパソコンくらいの大サイズの機械が山積みされており、人が隠れるようなスペースはなかった。また、部屋の灯りを点けてじっくりと観察してみると、部屋全体に相当、埃が積もっており、最近、その機械を動かした形跡が無いことも分かった。どうやら二階に隠れていたということはなさそうだ。

俺と霊奈は一階に下りてきた。

「とにかく、もう一度、この部屋を詳しく調べてみよう」

俺と霊奈は手分けして部屋を事細かく調べ始めた。

んっ？

最近、壁を塗り直したような跡がある。微妙にペンキの色が違わず。部屋の壁を調べていた俺は、二階に上がる階段の近くの壁に周りの色と若干色が違う箇所を見つけた。

「霊奈」

部屋の反対側の壁を調べていた霊奈が俺の側にやって来た。

「何？」

「この支部は最近、改築とか修理とかしたか？」

「いいえ、聞いたこと無いわ」

「ほら、ここを見てみるよ」

「……本当だ。真生を連れて来た時にはこんなになっていなかったはず」

俺は色の違う壁を叩いてみた。ある部分では音の反響が違った。

「向こうに空洞があるようだわ」

「どうする、霊奈？」

「壁を壊してみましよう」

「良いのか？」

「私が何とか言い訳しておくわ。真生が覗き穴を開けようとして失敗したとか」

「何だよ、それ」

「とにかく、ちょっと退いてて」

靈奈は剣を取り出して壁に向けて振り払った。剣から放たれた青白い光が壁に当たると壁は木っ端微塵に壊れた。壁の向こうには空洞があり、階段が地下に延びていた。

「こんな所に隠し階段があったなんて……」

「降りてみようぜ」

俺と靈奈は真っ暗な階段を携帯電話の光を灯りにして降りて行った。

階段を降りた先にはドアがあった。ドアを引くと鍵は掛かっておらず、スムーズにドアは開いた。部屋に足を踏み入れると自動的に部屋の電灯が点いた。

八畳くらいの広さの部屋の中には、幾つかの機械が置かれていたがどれも電源が切られているようだった。部屋の中央には人間が横になって入れるほどの大きさのカプセルが置かれていたが、その蓋は開かれていた。

「何だ、これ？」

「……これは冷凍保存をするための装置よ」

「何を冷凍保存するんだ。お刺身か？」

舟盛りなら百人前は楽に冷凍できるぞ。

「馬鹿！ 人間よ」

「人間？」

「そうよ。人間を人工冬眠状態にしておく装置よ」

そういうえばSF小説で読んだことがある。人工冬眠から醒めると遙か未来になっているとか、銀河の果てに向かう宇宙船の中でパイロットが人工冬眠しているとか……。でも、どうしてそんな装置がここにあるんだ？

「人工冬眠装置の使用は法律で禁止されているはずなのに……」

「どうして？」

「人を強制的に人工冬眠させると、仮死状態になって靈魂がその肉

体から出て行くけど、それを解凍させると靈魂が宿っていない健全な肉体に戻るの。そしてそんな肉体が欲しいという人達もいて、その人達の間で肉体売買がされるおそれがあるのよ」

なるほど。死んだばかりの靈魂をソウルハンターに捕まる前に冷凍保存していた肉体に宿らせれば、すぐに生き返させることができる。それを繰り返すと永遠に死なないことと同じだ。

「しかも、この装置は三か月前くらいまで使用されていたみたい」「どうして分かる？」

「ここにタイマー装置があるでしょ。その日付が……」
俺は靈奈が指し示した数値を見た。

「エンマ暦二〇三一年四月十二日」

紛れもない、俺が獄界に来た日だ。

「あの黒ローブの男がこの装置を操作していたのだろうか？」

「黒ローブの男はあなたの靈魂を欲しがっていた。ここで冷凍保存されていた肉体にあんたの靈魂を宿らせようとしたんじゃないかな」「でも、この人工冬眠装置はあの日に切れているんだろう。その冷凍保存されていた肉体は何処に行ったんだ？」

「これは私の推測だけど、……あの黒ローブの男自身がここで眠っていたんじゃないかな」

「タイマーが切れて起きて来たということか？ でも靈魂が宿っていない肉体がどうやって動くことができたんだ？」

「分からない。でも生命と靈魂は違っていてことは真生ももう理解しているでしょ」

「ああ、そうすると解凍された黒ローブの男の肉体が靈魂が宿っていないにもかかわらず動き出して俺達を襲ってきたと……」

「そう考えるしか無いわ」

「でもさ、……何故、俺なんだ？」

「えっ？」

「いや、だから……、まだ浄化されていない俺の靈魂が宿ったらその肉体は俺の記憶を保ったままになるんだろう。実際、そうなって

いるわけだし。黒ローブの男が何らかの目的を持って俺の靈魂を取り込んだとしても、自分の意志が働かなくなる状況になって、自らの目的は果たせないじゃないか？」

「それもそうね」

俺と靈奈はいくつかの仮説を立ててみたが、どれも帯に短し襷に長しで結論は出なかった。

「靈奈。俺達だけで話し合っても埒が開かない。龍岳さんに相談してみよう」

「そうね。今の時間なら多分、党本部にいたと思うから今から向かってみましょう」

「その必要は無い」

突然響いた声に振り向いた俺と靈奈の視線の先、地下室の入り口に立っていたのは 龍岳さんだった。

「お父様！ …… どうしてここに？」

「この支部の壁を壊した奴がいるという警報を聞いてやって来たのだ。おそらくお前達だろうと思ってな」

そう言うつと龍岳さんはステッキをつく音を響かせながら部屋の中に入って来た。

「…… お父様はこの人工冬眠装置の事もご存じだったんですね？」

「うむ。知っていた。何故ならそれを使ったのは儂だからだ」

「えっ！ お父様が、…… どうして？」

「儂がこの中で三年間眠らせていたのは…… 龍真の肉体だ」

靈奈は予想だにしていなかった展開にただ立ち尽くすしかなかったようだ。俺は…… 何故だかそんなに驚いていない。もちろん知っていたわけではない。しかし、そんな気はしていた。

「お前達を襲ったという黒ローブの男とは人工冬眠していた龍真の肉体だったのだろう」

「ど、どういう事なんですか？」

「靈奈。お前達には龍真は事故で死んだと伝えていたな」

「はい。…… 海岸沿いの高速道路を運転していた時に、ガードレール

ルを突き破って海に転落したと。大破した車は見つかったけれども、お兄様の遺体は見つからなかったと……」

「そつだ。だが、それは偽装工作なのだ」

「偽装工作？ いったい誰が何のために偽装なんてしたんですか？」

「龍真を殺した連中だよ」

「……お兄様を……殺した連中」

「そつだ。龍真は交通事故で死んだのではない。殺されたのだ」

靈奈の体がふらついたと思うと俺の方に倒れそうになった。

「靈奈！」

俺が靈奈の肩を抱いて支えてやると、靈奈は虚ろな目をして俺を見た。

「お兄様が……殺された」

「靈奈！ しつかりしろ！」

靈奈の視線は虚空を彷徨っていたが、龍岳さんが話し出すと俺の肩にもたれ掛かりながらも龍岳さんの一言一句を聞き逃すまいとするように龍岳さんを見つめていた。

「あの日、僕は国会に急用があつて、党本部に龍真を残して出掛けたが、妙に胸騒ぎがしたので、忘れ物をしたと言つて党本部に戻つて来た。そして副幹事長室に入ろうとした時、部屋に張られていた結界がまさに消滅しようとしていた。僕が急いで部屋に入ると、そこには体中を滅多差しにされた龍真が横たわっていた。龍真は虫の息だったが生きていた。だから結界が消失しても龍真はそのまま残つたのだ」

「……………」

「僕はすぐに龍真を『獄門の番人』の本部に連れて行き救命措置を施したが、意識は戻ることなく、そのまま植物人間状態になってしまった。その時、龍真の肉体から龍真の靈魂が出てきて、すべてを僕に話してくれた」

「お兄様は何とおっしゃったんですか？ お兄様を殺した犯人は誰なんですか？」

落ち着きを取り戻した霊奈はしっかりと自分の足で立ち、まるで龍岳さんを責めるように強い口調で問い詰めた。しかし自分の娘の取り扱いを知らないはずのない龍岳さんは口調を変えることなく話を続けた。

「犯人は『闇の騎士』達だ。しかし、どのプライベートアーミーに所属する者達なのかは龍真にも分からなかったようだ」

「そんな……。それじゃ結局、誰に殺されたのか分からないということじゃないですか！」

「そういうことになるな」

「でも、……でも、どうして私達に本当の事を教えてくれなかったんですか？ お父様！」

「龍真は党本部で闇の騎士に襲われたのだ。犯人は党の人間以外は考えられないだろう。党の副幹事長の息子が党本部で襲われて、しかも犯人は党の人間だとすれば、我が党にとって深刻なスキヤンダルだ」

「スキヤンダルを恐れるあまり、お兄様の死を曖昧にされてしまったんですか？」

「儂もそこまでお人好しではない！」

龍岳さんの怒りの声を初めて聞いた気がする。霊奈も龍岳さんの激しい口調は初めて聞いたのか、一瞬身をすくめるようにしたが、そのまま龍岳さんを見つめ続けた。

「儂と龍真は復讐を誓ったのだ」

「復讐？」

「そつだ。そのためにまず、儂は龍真と相談して、その肉体を冷凍保存することにした」

「どうしてそんなことを？」

「損傷して植物人間状態になった龍真の肉体を修復することができるかどうか、『獄門の番人』の科学者や医療チームに問うたところ、今すぐには不可能でも研究を進めることで将来的には必ず可能になると言われた。儂はその科学者達の言葉にすぎるように、違法とは

知りながら龍真がよく利用していたこの支部の地下に人工冬眠装置を密かに運び入れ、龍真の肉体を冷凍保存したのだ」

「お兄様は修復された自分の肉体を使つて、自ら復讐をするつもりだったんでしようか？」

「そうだ。それから龍真の靈魂は自らの記憶を消さないためには直ちに誰かの肉体に宿る必要があつた。しかし獄界でそれをすると目立ってしまう。そこで儂と龍真とで話し合つて、地界で暫定的に肉体に宿つて機会を待つことにした」

「……………」

「この支部で幽体離脱をした儂と龍真の靈魂はトランスポイントを通つて地界に行った。……………だが、そこで信じられないことが起こつた」

「……………」

「真生君、君は三年前の今頃、川で溺れただろう」

「はい」

「儂と龍真の靈魂はたまたまその現場に居合わせたんだよ」

「えっ！」

「川から引き上げられた君の肉体から君の靈魂が離れて行つたが、その一瞬の間に龍真の靈魂は君の肉体に宿つてしまつたのだ。もつともそれは龍真が意図して君の肉体に宿つたのではなく、龍真の靈魂が君の肉体に強制的に吸い込まれたようだった」

「俺の体に龍真さんの靈魂が……………」

「そして更に驚いたのは、龍真の靈魂が宿つた君の肉体に君の靈魂が再び戻つた事だ」

「……………俺の体に龍真さんと俺の両方の靈魂が宿つたということですか？」

「そうだ。そして目を覚ました君の肉体は君の記憶を保つたままだった。龍真の靈魂は君の肉体に閉じ込められてしまつたようだ」

「そ、そんなことができるんですか？」

「実際に儂の目の前で起きたのだから信じるしかない」

「でも、どうしてそんな事に？」

「これは僕の推測なのだが、龍真の靈魂は真生君の靈魂に吸収されて一体化してしまったのではないかと考えている。龍真の靈魂と一体化して強力な霊エネルギーを得た真生君の靈魂が肉体修復能力を高めて、溺れて仮死状態だった真生君の肉体を蘇生させたのではないかな」

「真生がお兄様の靈魂を利用したと？」

「龍真が俺を睨んだ。ちよつと待て。そんなことは俺は知らないぞ。」

「それは分らん。しかし、真生君が獄界に来てからの出来事を考えると、真生君の靈魂は龍真の靈魂と一体化して少なくとも二倍の霊エネルギーを持っていてと考えざるを得ないだろう」

「一体化して二倍の力を持った靈魂！ それって……」

「うむ。今までその現象が起こりうることは予想されていたが実際に確認がされた事は無い。永遠に不滅であるはずの靈魂を吸収して一つになって、より強力な霊エネルギーを発することができる靈魂……」

「デュアルソウル！」

今度は龍真は珍獣を見るような目で俺を見た。 「デュアルソウル」ってそんなに珍しいのか？

「真生君」

龍岳さんは申し訳が無いといった表情で俺を見ていた。

「実はそれ以来、僕は地界での君を子飼いのソウルハンター達に交代で見張らせていたのだよ」

「そ、それじゃ龍岳さんは三年前から俺のことを知っていたんですか？」

「そうだ」

俺が獄界に来てからの龍岳さんの態度は演技だったのか。政治家の度量はどれだけ腹芸ができるかによるらしいが、龍岳さんの得体の知れない底深さには俺は身震いをせざるを得なかった。

「そして三年後、霊奈が手にした死亡予定レポートに君の名前があることを知った。霊奈なら予定どおりに真生君の霊魂を連れて来るだろうから、僕はその日の朝早く支部に寄り解除タイマーをセットしてから党本部に向かったのだ」

「私が真生の霊魂を連れて来た時には、既にお兄様の肉体は冷凍が解除されていたということなんです」

「そうだ。僕はそれ以上は何もしていない。しかし、龍真の霊魂と一体化している真生君の霊魂が支部に来ると何か起きる気がしていた。そして、僕の予想どおり、その何か起きたようだ」

「それじゃあ、あの黒ローブの男はやっぱりお兄様だったんですね？」

「僕もその時には現場にいなかったから確実なことはいえないが、そうとしか考えられない」

「でもどうして霊魂が宿っていないお兄様の肉体が勝手に動き出したんでしょうか？」

「これも推測だが、かつての宿り主だった龍真の霊魂と一体化している真生君の霊魂の強力な霊エネルギーに共鳴して動き出したのだろう」

「それじゃ、あの黒ローブの男は真生がリモートコントロールしていたってことですか？」

だから俺を睨むな。俺はまったく心当たりは無いぞ。

「ひよつとしたら龍真の霊魂がそうさせていたのかもれないな？」

「お兄様の霊魂が？ そうだとしたら、どうして私達を襲ってきたんでしょうか？」

「霊奈が戦いを挑んで来たからだろう」

「えっ……」

「龍真は、いや、龍真の肉体はお前達を殺すつもりなどなかったはずだ。龍真が本気を出すと霊奈などは一撃も反撃できないのではなかったかな？」

「確かに……。でも、どうしてお兄様は私に名乗ってくれなかった

んでしょう?」

「龍真の肉体には多数の刺し傷があつて、手当をしてもその傷跡は醜く残つていた。霊奈にそんな自分を見られるのが嫌だったんだらう」

「……」

「しかし真生君の靈魂はその強力な霊エネルギーで、瞬時にその肉体の傷を修復するとともに生前の真生君の容姿に改変したんだらう。その時に起きた衝撃というのは、肉体改変の際に発せられたエネルギー放射ではないかと考えている」

俺の中には龍真さんがいる。……そうだとすれば、戦闘の時、身体の中から沸き上がってきた俺ではない声は龍真さんの声だということになる。そして、元々、龍真さんが持つていた能力もそのまま引き継いだということであれば、俺があんな超人的な能力を発揮できたことも納得ができる。

でも普段の俺は霊奈の駆け足について行くのにも精一杯なのに……?

「おそらく真生君の靈魂が肉体を支配しているということは生前の真生君の肉体能力を復元したものになつているのだらう。しかし、元々、その肉体は龍真のものであつて、潜在的には龍真が有していた能力が出せるはずなのだ。そして戦闘とか演説といった真生君が経験していないことをしなくてはならなくなつた時、真生君の靈魂は一体化している龍真の靈魂の助けを借りているのではないだらうか」

「いつもは自分が肉体の真ん中に居座つておいて、自分が苦手なことをしなくちゃいけない時にはお兄様の靈魂に手伝わせているってこと? 真生、あんたって奴は……」

おいおい、だから俺が自らの意志でしていることじゃないって。

「でも、そうするとお兄様の靈魂は真生の靈魂に吸収されて消滅してしまつたわけではないのですよね?」

「真生君が龍真の有していた能力を遺憾なく発揮しているところを

見るとそうなんだろう。ひよつとしたら、また龍真の靈魂が分離されることもあるかもしれないし、そんなことはあり得ないのかもしれない。それは誰にも分からない」

龍岳さんは俺の側にやって来た。

「真生君。俺を軽蔑するかね？　我が息子を失ったことで俺も冷静な判断を欠いていたところもあつたようだ。法律で禁じられている人工冬眠装置を使用したり、ずっと見張っていた君の靈魂が獄界にやって来ると分かったら、龍真の肉体を解凍しておき、何かが起きることを期待していた。そして俺の期待どおりに龍真の肉体は蘇つた。もつとも蘇つたのは真生君の記憶と容姿となつた龍真だつたがね。……………俺は君を利用したのだ。俺自身の我が儘を通すためにな」

俺を見つめる龍岳さんの目は老獪な政治家のものではなく、靈安室で親父が見せていたあの目と同じ、息子を失つた父親の目だつた。

「俺はソウルハンターの試験の時に親父が死ぬと告げられて、やっぱり悩みました。肉親が死んでしまうということはすごく悲しいことです。……………あなたを責めることはできません」

「そうか。……………龍真は自ら君に宿ることを選んだのかもしれないな」

「それはどういう意味ですか？」

「いや、何となくそう思っただけだ」

俺の肉体が宿りやすかつたということなのか？　それとも……………。

「それよりお父様。お兄様を殺したと思われる奴は誰なんですか？」

靈奈はそいつの名前を聞いたら、すぐにでも飛び出して行きそうな勢いで龍岳さんを問い詰めた。

「それを聞いてどうするつもりだ？」

「私がお兄様の仇を討ちます」

「証拠は無いぞ」

「証拠？　証拠ならお父様がお兄様の靈魂から直接聞かれたことが証拠です。殺された本人が言っていることなんですから、これ以上の証拠はありません」

「龍真を直接襲ったのは『闇の騎士』にすぎない。犯人がそれを命じたという証拠は何も無い。龍真も自分の推測を述べたにすぎないんだ」

「でも……」

靈奈は本当に悔しそうに両拳を握りしめて俯いて唇を噛み締めていた。

しばらくそんな靈奈の顔を見つめていた龍岳さんが突然笑い出した。

「はははは」

「お父様？」

龍岳さんは、きょとんとした顔をしていた靈奈を笑顔で見つめながら言った。

「靈奈は儂が止めても突っ走って行ってしまっただろう」

「お父様……」

さすが龍岳さんは自分の娘のことはよく分かっている。

それに俺も利害関係者だ。俺の中には犠牲者である龍真さんがいるんだからな。

「龍岳さん。俺も知りたいです。全ての元凶を作った奴が誰かを？」
「……………分かった」

第六章 復讐

次の日の夕暮れ時。

少し前には街灯も点灯し出した、通学路の途中にある広い緑化公園には、子供達はもちろん、大人の姿も見えなかった。

俺は公園の茂みの中に隠れるようにしゃがみ込んでいた。こんなところを誰かに見られたら覗き魔の痴漢にでも間違えられそうだ。もともと本当にそんな趣味を嗜んでいるとしても、学校の帰り道に制服姿のままで覗き趣味を満喫するほど俺も馬鹿ではない。学校に通報されてしまうと一発退学モノだからな。

断じて言うておくが、俺は好き好んでこんな所にいるわけではな

い。霊奈の奴が普段は見せたことのないウルウル瞳で「側にいて」と俺に懇願しておきながら、「でもあんたが一緒にいると巧く訊き出せないと思うからどっかに隠れて」と抜かしゃがったからだ。その霊奈は、俺が隠れている茂みのすぐ前にあるベンチに学校の制服姿のまま一人で座っていた。

誰かが霊奈に近づいて来ている足音が聞こえた。どうやら待ち人が来たようだ。俺が茂みの隙間から覗き見していると、そいつは霊奈が座っているベンチの前に立っていた。

「嬉しいねえ。霊奈から誘ってくれるなんて」

「ちよつと話がしたくてね」

「こんな所じゃムードが出ないじゃないか。僕の行き付けのカフェがあるから、そこに行ってしつぱりと話をしようじゃないか」

「そんな所じゃできない話だから。それに誰かに話を聞かれると困るのはあんたの方もよ」

「ど、どういう意味だ？」

霊奈がベンチから立ち上がり、そいつと向かい合って立った。

「あんたはお兄様とは同級生だったわね」

「……ああ。……それがどうした？」

「お兄様が亡くなられて、もう三年になるわ」

「ああ、そうだな。今でも龍真が事故で亡くなったとは信じられないね」

「本当に事故だったのかな？」

「えっ？」

「あんたはお兄様が死んだのが事故じゃないって知っているんじゃないの？」

「じ、事故じゃないってどういうことだ？ ……警察だって事故だと発表しているぞ」

「でも、お兄様の遺体は見つかっていない」

「……かなりのスピードを出していたようだから海に放り出されたんじゃないか。あの辺りの海は意外と水深もあるようだからな」

「遺体だけじゃない。お兄様の靈魂もまだ見つかっていないの。そして、……私はソウルハンターよ」

「……！ まさか？」

声を聞いているだけでも動揺しているのがありありと分かった。意外と気が小さい奴のようだ。

「龍真の靈魂が見つかったのか？」

「見つかったとしたら？」

「ははっ……はははは、何を今頃言っているんだ、靈奈。あれからもう三年も経っているんだ。仮に龍真の靈魂が見つかったとしても、もう忘れてはいるはずだ！」

「何のこと？ 何を忘れているの？ あんたはお兄様に忘れてもらいたいようなことをしたの？」

「……………」

「この前のエンマの誤作動、まだ正式な結論は出ていないけど、嵐月会がバックアップデータを保存しているライブラリにバグが見つかって、それが原因ではないかと考えられているみたいよ。約三年前に何らかのデータ処理がされていたようだけど、……あんた、何か心当たりは無い？」

「……………知らない。何も知らない」

「それじゃ、あんたの体に訊いてみましょうか？」

「ひい〜」

靈奈の奴、こんな平和な公園で剣を出しやがった。まあ、気持ちは分かるが闇の騎士でもない奴に剣を突き付けているところを誰かに見られたら強盗犯だって思われちゃうぞ。靈奈と一緒に痴漢と強盗の容疑で新聞ネタになるのは御免だ。そろそろ出て行って止めてやるか。

その日の夜。

俺は新しく支給を受けたエア・スクーターに乗って、靈奈と一緒に都心に向かっていた。中央官庁街の中心に広々とした敷地の国会

議事堂があり、その隣に総理官邸があった。

霊奈はソウルハンターの女性用制服である黒のゴスロリドレス、俺も新しく支給を受けたソウルハンターの男性用制服であるタキシード調スーツを着ていた。

俺と霊奈は総理官邸の近くにエア・スクーターを停めて、総理官邸まで歩いて行った。

総理官邸は、内閣の執務事務室などのパブリックスペースと、総理の家族の住居であるプライベートスペースを併せ持つ、全面ガラス張りのような五階建ての建物だった。目には見えないが当然、人工境界が張られているだろうし、塀の周りにも武装警官が巡回していた。正門も大勢の武装警官が警備をしていた。

俺と霊奈は正門から堂々と乗り込んで行った。当然、警備の警官に止められた。

「止まれ！ 何の用だ？」

「総理に話があつて来ました」

「誰だ？」

「神聖自由党の御上副幹事長の娘、御上霊奈です」

霊奈はIDカードを見せながら言った。

「そちらは？」

「同じく御上副幹事長の秘書、永久真生です」

俺は沙奇さんから借りた男性秘書のIDカードを見せた。

警備の警官達の言葉使いが変わった。そりゃそうだろう。龍岳さんは世間話をするだけでも総理とすぐに会うことができる実力者だ。その娘と秘書が来ているんだ。話も聞かずに追い返すことがあったら後で責任者の首が飛びかねないからな。

「アポはお取りですか？」

「いいえ、緊急の用件なので取っていません」

「それでは少々お待ちください」

武装警官の一人が正門横にある詰め所の電話で連絡を取っていたが、しばらくして俺達の近くまで戻って来た。

「残念ながら、総理は現在来客中であり、本日はお会いすることはできないということですよ」

「国会は閉会中で、それにもう午後十一時だというのに、まだお客様の相手をしなければならいなんて、やっぱり総理ともなるとお忙しいんですね」

霊奈の皮肉とも取れる台詞に武装警官達も苦笑するしかなかったようだ。

「とにかく今日はお引き取り願います」

「分かりました。どうも失礼しました」

俺と霊奈は踵を返して正門から出て行った。

「どうする、霊奈？」

「とりあえず総理が官邸の中にいることは確認できたわ。少なくとも公務での来客予定はなかったはず。どんなお客様がいらっしやっているのか知らないけど、こっちは今すぐ会いたい。そのお客様にはキャンセルしてもらいましょう」

俺と霊奈は官邸と車道を挟んで反対側の歩道を歩いて行き、官邸の裏門が見える位置まで来ると街路樹の陰に隠れた。当然のことだが、ここにも分厚い警備の壁が立ちはだかっていた。

「真生。ここでちょっと待ってて」

霊奈はそう言うと、一人で正門の方に戻って行った。しばらくすると正門の方で爆音が響いた。霊奈の奴。手加減ということを知らないのか？

裏門で警備していた武装警官達も全員が正門の方に向かって走り去って行くと、すぐに霊奈が戻って来た。

「霊奈。いったい何を爆発させたんだ？」

「花火を打ち上げただけよ。ちょっと火薬の量が多かったかもね」

まあ、花火の季節ではあるけど……って、家の玄関で花火なんて、良い子のみんなは真似しちゃ駄目だぞ。

「それより今のうちよ」

霊奈は裏門に近づき、我蘭から取り上げた訪問者用カードキーを

ポケットから取り出して裏門のセンサー部分に近づけた。音もなく開いた扉をすり抜けて俺達は官邸の敷地内に入り込んだ。

「さあ、ぐずぐずしないで。行くわよ」

同じカードキーで裏口から官邸の中に入った俺達は、赤絨毯が敷かれた廊下をプライベートルームまで歩いて行った。廊下は節電のためかやや薄暗かったが、さっきの正門前の花火騒ぎで官邸内部の警備も手薄になっているようで、警備の警官には一人も会わなかった。

総理がリビングとして使用している部屋までは、龍岳さんからもらった官邸内部の見取り図のお陰で迷うことなくたどり着くことができた。

ドアに耳を付けると総理の話し声が聞こえた。

俺がゆっくりとドアノブを回すと鍵は掛かっていなかった。ドアを少し開くと部屋の灯りが薄暗い廊下に一筋の光を映し出した。

俺と霊奈はノックもせずにとその部屋に入ると、静かにドアを閉めた。

シャンデリアを模した灯りが煌々と部屋の中を照らしており、ドアに背中を向けた応接セットのソファに座った総理のバーコード後頭部が見えた。どうやらバスローブを着ているみたいで、右手には高そうな酒が並々とつがれたブランディグラスを持ち、口には葉巻を啜っていた。そして、同じソファに座っている下着姿の女性が総理の方にしなだれかかっていた。

どうみても成金親父が愛人を侍らせている図としか見えないぜ。

霊奈は携帯電話を持ち出すとカメラのシャッターを押した。カシヤツというシャッター音に総理と女が驚いて振り向いた。

「な、な、何者だ？ お、お、お前達は誰だ？」

やっぱり親子だな。動揺している時の様子は我蘭そっくりだ。

「お楽しみ中、申し訳ありません。私は神聖自由党副幹事長御上龍

岳の娘、御上靈奈と申します」

「俺は、いや僕は、以前に党本部でお会いしました、副幹事長の秘書見習いの永久真生です」

「な、何の用だ？」

「総理。それよりそちらの女性は奥様ではないようですが……。総理のお子様は息子さんだけのはずですから娘さんでもないはずですね。……一国の総理官邸にどこの誰だか分からない女性を連れ込むのは情報管理の面からいかなものでしょうか。良い雰囲気の一ショット写真も撮れましたから公表しても良いんですけど……」

「わ、私を脅迫するつもりか？」

「正直に話してくれなければ……」

靈奈は下着姿の女性に床に落ちていた洋服を投げて寄越した。

「あなたは出て行ってちょうだい。それと外のSP達には何もしゃべらないこと。良いわね！」

女は慌てて服を着始めた。

「総理からもこの女性にそう言っていただけませんか。これから私達が総理にお話しする内容がSP達に聞かれるとお困りになるのは総理の方だと思いますから」

「何の話だ？」

「龍真お兄様のことです」

「……何の事だかさっぱり分からないのだが」

「あなたの息子さんがすべて話してくれましたよ」

「……！ 分かった。お前はそのまま帰れ。SP達にも何も話すな。そう言つと総理は財布から数枚の紙幣を出して女性に投げ渡した。女性は紙幣を拾い集めると部屋から出て行った。

「それで話というのは？」

総理は何とか威厳を示そうとしているのか、ソファにふんどりかえつて俺達を見た。しかし靈奈がそんなことで萎縮するはずもなかった。

「座って良いですか？」

「ああ。ど、どうぞ」

霊奈と俺は総理が座っているソファと直角の位置に置かれていたソファに腰掛けた。

「単刀直入にお訊きします。三年前にお兄様を殺すように嵐月会のブライベートアーミー『新月の蠍』に命令したのは、……総理、あなたですね？」

「いきなり何を言うのだ？ 龍真君は交通事故で死んだのではないかな」

「だから、あなたの息子さんがすべて話してくれたんですよ。今、私達はそれが本当なのかどうかをご本人に確認しに来たんです」

霊奈は怒りを押し殺した声で話を続けた。

「三年前、鬼崎家で代々保管してきたエンマの分割データバックアップの一つが消失していることが分かった。我蘭が興味本位で持ち出して中のデータを確認しようとして誤って消失させてしまったようです。そんなことがあったなんて初耳でした」

「……………」
「我蘭は家族に相談すると厳しく叱責されると思ったらしくて、同級生で友人だった龍真お兄様にどうすればいいのか相談をした。でも、お兄様は、霊魂管理庁に正直に申し出て、正式な手続きを踏んでエンマ本体から再度バックアップを取ることを勧めた」

「……………」
「我蘭は仕方なくあなたにすべてを白状して、お兄様が提案した方法を探ることをあなたに話した。でもあなたはそれを拒否した。エンマのバックアップデータを消失させるなんて、これまで聞いたこともない不祥事だわ。これを公にすることは、あなたの派閥はもとより神聖自由党にとっても大打撃になる。そこで当時、神聖自由党の幹事長だったあなたは職権を濫用して正式な手続きを踏まずに密かにエンマ本体からバックアップを取ることにした。そのことがエンマにどのような影響を与えるのかも検証することなくね」

「……………」

「あんたの計画は秘密裏に行われ成功した。そうすると自らの一族以外にこのことを知っているお兄様の存在が邪魔になってきた。お兄様が一言しゃべるとあんたは破滅だからね。あんたはお兄様を亡き者にしようとしたのよ」

「……………」

「その日、お兄様は、お父様や秘書の人たちがみんな出掛けた後の党本部の副幹事長室にいた。たぶん我蘭かあんたが話があるとか言っつて、お兄様を一人で待たせていたんでしょう。そしてあんたが指示をした『新月の蠍』の闇の騎士達が結界を張ってお兄様を殺そうとした」

「……………」

「お兄様が息絶えていたら結界の消滅とともにお兄様の遺体も消失するはず。あんたはお兄様が行方不明ということにならないようにお兄様の車を海に沈めて交通事故死を偽装したのよ」

「……………」

「でも、あんたはお兄様の實力を見誤っていたようね。お兄様は『獄門の番人』で一・二と言われた闇の騎士だったのよ。刺されたとしても咄嗟に急所を避けるようにすることもできたのよ」

「……………」

「お兄様は生きていた。結界が消滅してもお兄様は消失しなかったの」

「そ、そんな……………」

「でも、お兄様は植物人間状態になってしまった。お父様はお兄様の肉体から出てきたお兄様の靈魂から直接話を聞いているの。……………すべてね」

「御上副幹事長が…………」。しかし副幹事長は今まで何も言わなかったぞ」

「お父様も党のことを第一に考えて、すぐにあんたを追及することはしなかった。何よりもお兄様の靈魂が話したことだけで、あんたを追及する証拠がなかった」

「……そ、そうだ。何も証拠はない。殺された人の霊魂からソウルハンターが事情を訊いた内容が刑事裁判の証拠となるには、正式な手続きを踏んだ上、警察官か検事の立ち会いの元で事情聴取が行われる必要がある。副幹事長が自分の息子の霊魂から訊いたというのは証拠にならないだけでなく中立性に乏しい。私を陥れる妄言だともいえる」

「そうよ。だからお父様はここにいる真生をあなたに会わせた。真生がお兄様の生まれ変わりだと言って、あなたに鎌を掛けたのよ。あなたが自分から尻尾を出すようにね。狙いどおり、あなたが命じた『新月の蠍』の闇の騎士が私達を襲ってきた。プライベートアーミーに指示ができるだけの地位にある党の人間で、真生がお兄様の生まれ変わりだということを知っていたのはあなただけだからね！」

「知らん！ 言い掛かりを付けるのも好い加減にしたまえ！」

「どうしてもしらを切るつもり」

「そうだ。お前達が言っているのは状況証拠だけだ。私が龍真君を襲わせたという確かな証拠は無いではないか」

確かにそうだ。状況から言えば、このおっさんが真つ黒なんだが、プライベートアーミーに命令を下した証拠なんて何も無い。我蘭が吐いたことも、あれは霊奈が剣で脅かしたからだと言われれば覆ってしまう。

霊奈も下唇を噛みながら総理を睨んでいたが為す術は無いようだ。……甘かったかもしれない。自分の息子が吐いたことを突き付ければあっさりと認めると思ったんだが、さすが総理にまで昇り詰めている男だ。一筋縄ではいかない。

出直してくるか？ ……いや、もうこうなった以上、出直しはできない。こっちから総理に喧嘩を売っておいて、すごすごと引き下がることは龍岳さんの進退にも関わることだ。

どうする？

んっ？

まただ。俺の体の中から何かが湧き上がってくるのを感じる。

俺は思わずソファから立ち上がり、俯いて自分の体を確認すると、俺の体が青白く光っているのが分かった。

「真生！ どうしたの？」

隣に座っていた霊奈も立ち上がり、心配そうに俺の側に寄って来た。俺は意識はしっかりと持っていたが、何故か口を利く事ができなかった。

俺の体から発せられていた青い光はどんどんその輝きを増して眩しいほどになると、俺の前で光の固まりを作り始めた。そしてそれはゆっくりと人の形に変わっていった。

その光の中から浮かび上がってきたのは、俺も写真で見たことがある男性の姿だった。

「……お兄様！」

霊奈はもちろん、総理もその姿を見て腰を抜かすほど驚いていた。「お、お前は……、そ、そんな馬鹿な……」

光の龍真さんはするどい視線を総理に向けながら右手を差し出し、総理を指差した。その目は明らかに怒り、非難し、軽蔑していた。ソファから滑り落ちた総理は腰を抜かしたように床に座り込んでしまった。

「わ、私が悪かった。……頼む。許してくれ。仕方がなかったことなんだ」

総理はまるで幽霊を見ているかのように恐れおののきながら、光の龍真さんに何度も土下座をした。

これは……もしかして俺の靈魂に吸収されたという龍真さんの靈魂なのか？ 自分を殺した張本人を前にして、その怨念が一時的に龍真さんの靈魂を解放したとでもいうのか？

もしこれが龍真さんの靈魂だとしたら、ソウルハンターでもない総理にも見えているのだから強烈な霊エネルギーが発せられていることになる。

「お兄様、お兄様の靈魂なのです。霊奈です。私とお話をしてください！」

霊奈は光の龍真さんに近づき抱きしめようとしたが、すり抜けてしまつてそれはできなかつた。龍真さんは一転、優しい笑顔になつて霊奈を見つめた。

「お兄様……」

霊奈の目からは大粒の涙が止めどなく流れ落ちていた。

龍真さんは右手を挙げて霊奈の頭を撫でるようにすると、次第に光が暗くなつてきた。

「お兄様。行かないでください！ 戻つて来てください、お兄様！」

霊奈の必死の願いも虚しく、俺の体から出ていた青白い光が消えると同時に龍真さんの姿も消えてしまつた。

「お兄様……」

霊奈は床に崩れ落ちて頂垂れながら泣いていた。

俺は霊奈に掛けるべき言葉が思いつかず、霊奈の側に跪いて霊奈の肩に手を添えてやることしかできなかった。

総理を見てみると、恐ろしくて顔を上げることできないようで、土下座をしたまま打ち震えていた。

その時！

突然、部屋に結界が張られ、三つの黒い影が浮かび上がってきた。以前に俺達を襲つてきた奴らと同じように、黒いサングラスを掛け、黒いスーツに身を包んだ男達だった。しかし前回の男達よりもかなり危険な香りがする。こいつらはかなりやばいぞ。

霊奈もすぐに我に返り、立ち上がると右手から剣を出した。

一方、総理は一気に形勢逆転とばかりに喜んで立ち上がつて、俺達を指差しながら黒服達に指示をした。

「こいつらは官邸に不法侵入して来て、事もあろうに総理大臣を強請に来た不届き者だ。かまわん、処刑しろ！」

しかし黒服達は総理の指示にまったく反応しなかつた。それどころか黒服の一人が総理に向かってナイフを投げると、総理の来ていたバスのローブの腰紐が切れてバスのローブが床に落ち、総理はパンツ一丁の惨めな姿となつた。

「な、何をする？ 血迷ったか？ 私は総理大臣の鬼崎だぞ！」

霊奈は男達から注意を反らすことなく総理に冷酷な通告をした。

「こいつらにはあんたが呼んだんじゃないでしょう？ 万全の警備体制が敷かれている総理官邸にこっそりと入って来られるんだから、こいつらも私達みたいに誰かから鍵を預かっているんでしょうね。」

つまり、あんたじゃなくて別の誰かからの指示を受けていて、それは私達を始末するついでにあんたも道連れにしようとしているんじゃないの？」

「えっ？」

「私達がここで言ったことを、派閥や『獄門の番人』のメンバーに話していないという保証ができる？ それならそんなスキャンダルの元凶であるあんたの口を封じようとしても不思議じゃないわね」

「そ、そんな馬鹿な……。おい、お前達。私を助けに来てくれたんだよな？」

総理は哀願するような目で黒服達に語り掛けたが、黒服の一人は無言で総理に向かってまたナイフを投げた。しかし、そのナイフは素早く総理の前に移動した霊奈が剣で弾き落として総理には届かなかった。

「これで分かったでしょう。あんたは所詮、捨て駒でしかなかったのよ。利用価値が無くなれば、あっさりと捨てられる運命だったのよ」

「そ、そんな……」

総理の表情に再び恐怖の二文字が浮かんで来た。

「頼む。助けてくれ！」

「誰に言っているの？」

「お前達だ。この刺客達には言い訳は通じない」

「お前達？」

「失礼しました。あなた様方をお願いします」

泣きわめきながら土下座をして俺と霊奈に助命を頼む男が一国の総理だとはねえ。ヘタレの俺から見ても情けねえ。

「私はあるたを許すつもりはないわよ。でも、あんたが自首をするっていうのなら命は助けてあげる。こいつらも刑務所までは追って来ないかもね」

「分かった。自首する。約束する。だから命だけは助けてくれ」

霊奈は一瞬俺の顔を見てから、三人の黒服達の方に向き直った。

「真生、行くわよ」

「ああ、分かった」

俺も右手から大鎌を出して戦闘態勢に入った。

油断は禁物だ。こいつらは「新月の蠍」の闇の騎士の中でも選りすぐりの奴らのようだ。ちょっとでも隙を見せるとこっちの命は無い。

黒服達は短い槍のような武器を出して俺達に迫って来た。

次の瞬間、霊奈に二名、俺に一名の黒服達が打ち込んで来た。二・三合打ち合うが、かなり強い。しかも女性の霊奈に対してそんな強い奴が二人がかりだなんて、霊奈を先に倒してしまおうという魂胆が見え見えた。

しかし、そこは霊奈だ。二人を相手に傷一つ負っていない。もつとも二方向から打ち込まれる槍を防ぐことに精一杯で、攻撃を仕掛けることはできない状態だった。

霊奈を虐める奴は許さない！

俺の心の中で声が響いた。……………そうだ。俺は霊奈を守らなければいけないんだ。

「霊奈！」

俺に斬り掛かって来ていた黒服の槍をかいくぐって、俺は霊奈に襲い掛かっていた二人の黒服に斬りつけた。黒服達は一旦下がって三人が固まった。俺も霊奈の側に行った。

「霊奈！ バラバラで相手しない方が良い」

「分かった」

しかし、このまま力尽くで打ち合っても勝ち目は少ない。この不利をどうやって埋めるか？

霊奈を虐める奴は許さない！

俺なら三人の黒服を相手に少なくとも防戦はできるはずだ。それだけの自信はあった。

そうだ。俺が盾になって霊奈を守りつつ、攻撃は霊奈の剣に期待しよう。

「霊奈。お前は俺が守る！俺がこいつらをくい止めておくから、お前は後ろから隙を見て斬りつける！」

「真生！」

「一撃で倒せ！」

俺は三人の黒服達に突進をして無我夢中で大鎌を振り回した。さすがに三人の強敵を相手にするのはきつい。しかも後ろに回られないようにしながらだ。腕や足にいくつか切り傷を付けられた。霊奈は俺の背中において敵の隙をうかがっている。

大丈夫だ、霊奈ならやってくれる。

俺が振り回した大鎌が黒服の一人の顔面近くを通り過ぎ、それを避けた勢いでその男の体勢が崩れた。霊奈がその隙を見逃すことはなかった。俺の背中を蹴って、俺の身体ごとその黒服を飛び越えて背後に立った霊奈は、その黒服が振り向く前に上段から一気に切り倒した。

さすがだぜ、霊奈！

これで二対二。すぐに俺の側に戻って来た霊奈は心配そうに俺に声を掛けてきた。

「真生。大丈夫？」

「ああ、何とかな」

これからはタイムマン勝負だ。残った二人の黒服に俺と霊奈は差して勝負を挑んだ。

しかし、これが本当に俺なのか？俺は龍真さんの肉体が有していた潜在的な力に感心するしかなかった。自分が考えるより速く身体が反射的に動いていた。俺は下手に考えないようにした。身体に任せて動くことが龍真さんが有していた能力を全開で発揮できると

思ったからだ。

俺は黒服が持っていた槍の剣先が一瞬下がったことを見逃さなかった。素早く上段から切り下げた。黒服の身体は真つ二つに切断されて倒れた。

霊奈はまだ残り一人の黒服と打ち合っていた。お互いに息が切れていたが、こうなるとやっぱリスタミナに差がある女性の霊奈が不利になってくる。俺は大鎌を構えて助勢に加わろうとした。

「真生！ 手出しをしないで！」

霊奈は黒服から目をそらすことなく叫んだ。

「本当はお兄様の仇の総理を切つてしまいたいところだけど、命は助けると約束したから……。その代わり、こいつを切つてお兄様の仇を討つつもりにしたいの。だからこいつは……。私が倒す！」

俺は黙って一步後ろに下がって、いつでも霊奈を助けることができる位置をキープしながら霊奈の戦いを見守ることにした。

霊奈はもうほとんど体力が残っていないはずなのに凄まじい勢いで黒服に剣を打ち込んでいった。その気迫に押されたのか、黒服は防戦一方になりながら徐々に後退していった。そして、壁際に追い込んだ黒服の槍を弾き落とした霊奈は、黒服の喉元に剣を突き付けた。

「あなたには恨みは無いけれど、こうしないと私の怒りを持っていく先が無いの！ 生まれ変わる時には、……。こんな職業を選ぶんじゃないわよ！」

霊奈が袈裟懸けに黒服を切り捨てると、断末魔を残して黒服は倒れた。

戦いは終わった。結界が消滅し始めると、倒れていた黒服達も消えていってしまった。

霊奈は剣を持ったまま、俺に背中を向け立ち尽くしていた。後ろから俺が近づくと、霊奈の肩が震えていた。

「霊奈……」

俺が声を掛けると、霊奈は剣を落として振り返り俺の胸に飛び込

んで来た。

靈奈は泣いていた。何も言わずに俺の胸で泣きじゃくった。ふと部屋の片隅で震えていたはずの総理に目をやると、クツションを頭に抱えたまま失神してしまっているようで、失禁をしてしまったのかパンツが濡れていた。

こんな奴に大好きな龍真さんを殺されたんだ。靈奈のやり場の無い悔しさは痛いほど分かった。俺は靈奈の肩を優しく抱いて、靈奈の気が済むまで泣かせてあげることしかできなかった。

第七章 エピローグ

「真生！ 学校に遅れるわよ。早く起きなさい！」

最近、靈奈が毎朝起こしに来てくれるのは良いが、敷き布団ごとベッドから放り投げて起こすのは勘弁してほしい。幽奈さんのように、もうちょつと優しく起こしてくれないかな。

まあ、もつともベッドから落ちた時の俺と靈奈の位置関係によつては、既に制服姿の靈奈のスカートの中が見えることもあるから、その日の運試しにはなっている。ちなみに今日のような白と青のストライプの時は午前中がラッキータイムだ。

「真生！ どこ見てるのよ！ 変態！」

そ、そんなところを踏みつけるな！ また死ぬだろうが。

スカートの中を見られたくないのであれば制服に着替える前に来ればいいじゃないか。まったく、靈奈の家庭内暴力はエスカレートする一方のような気がするぜ。

でもまあ、お陰で遅刻をすることなく学校に行けているしな。つて、あれっ、……：……：……：そういえば靈奈の奴、俺に一人で学校に行けつて言っただけだったっけ？ ……：……：結局、獄界に来てからずっと靈奈と一緒に学校に行っているなあ。……：……：まあいい。とにかく早く着替えないと遅刻だ。

俺も制服に着替えてダイニングに降りて行った。

その日の食卓には珍しく龍岳さんもいた。家族全員で朝食を食べ

るのは久しぶりだ。

テレビでは、体調不良で総理を辞職した鬼崎議員が議員も辞職すると発表したこと、そして新しい総理には薫風会の代表者である党幹事長が就任する予定であると伝えていた。龍岳さんの派閥がいよいよ総理派閥となったということだ。龍岳さんにも幹事長への昇任打診があつたようだが断つたようだ。

鬼崎元総理については、自首されると現在の厳しい情勢から党に大打撃になるということで、党の最高幹部会で事件として警察には通報しないということになったが、鬼崎議員の永久追放が決定され、「獄門の番人」による監視が許されたのだ。

政治のニュースが一段落すると龍岳さんがテレビの電源をリモコンで消した。

みんなが龍岳さんに注目すると龍岳さんは俺の顔を見ながら話し掛けてきた。

「真生君。俺から君にまたお願いがある」

「はい、何でしょう？」

「俺の養子になってもらいたい。俺の息子になってほしい」

思いもよらぬ言葉だった。確かに俺の肉体は元々は龍真さんの肉体でその中には俺の靈魂と一緒に龍真さんの靈魂も宿っている。俺の半分以上は龍真さんなのだ。しかし、俺は永久真生でもある。

「お父様」

「どうして？」

みんな、龍岳さんの突然の申し出に驚いていた。どうやら三姉妹にも相談することなく龍岳さんが一人で決めたことのようにだ。

「真生君なら俺の後継者になれるはずだ。表でも裏でも。これから靈奈と一緒に俺の力になって欲しい」

「私と一緒に……、お父様、それはどういう意味なんですか？」
靈奈が慌てた様子で龍岳さんに問い質した。俺も訊きたい。

「いや、そんなに深い意味は無い。一人よりも二人で協力してもらつと俺も安心できるということだ。それとも靈奈は真生君とずっと

「一緒にいたくはないのかな？」

「な、何を言っているんですか、お父様」

思わず俺と目が会った霊奈は顔を赤らめながらそっぽを向いた。

「妖奈はずっと真生兄ちゃんと一緒にいるからね」

「ちよつと！ 妖奈ちゃん」

妖奈ちゃんが俺の側に寄って来て腕を組んで身体をすりすりしてきた。……妖奈ちゃん、嬉しいけど朝から刺激が強すぎだ。

「私も真生さんがいてくれたらご飯の作り甲斐があるというものです」

幽奈さんも俺のお代わりしたご飯をよそおいながら微笑んでいた。

「幽奈さんまで」

「すぐに返事をくれとは言わない。じっくり考えてほしい。霊奈、

……良いかな？」

「……まあ、みんながそう言うのなら……仕方が無いわね」

霊奈は口を尖らせながらも嬉しそうに見えるのは俺の気のせいか？

「真生君。また学校が休みの時には、俺の後援会事務所にもちよくちよく顔を出してやってくれ。みんな君に会いたがっているようだ」

「そ、そうですね。分かりました」

「そうだ！ せっかくだから霊奈も一緒に行って二人で演説すれば？ なんだか夫婦漫才みたいで面白いかも」

「止めてよ、妖奈！ 何で私が真生と一緒に夫婦漫才しなきゃいけないのよ」

「良いじゃない、もう夫婦みたいなものだから」

「えっ！ な、何を言っているのよ！」

「知っているよ。霊奈が真生兄ちゃんのお弁当を作ってあげたいからって言って、幽奈に料理を教わっていることを」

「えっ！」

霊奈が驚いて幽奈さんの方を見たが、幽奈さんは苦笑しながら首を横に振るだけだった。

「妖奈！ あんた、鎌掛けたわね！」

「あれ、凶星だった？」

「妖奈！」

食卓の周りを逃げる妖奈ちゃんを霊奈が追いかけて、その二人を龍岳さんと幽奈さんが笑顔で眺めていた。

やれやれ、朝から騒がしい家だ。でも、………地界で俺の供養をしてきている親父とお袋と美咲には悪いが、この家の居心地はすこぶる良い。本当の家族として、御上真生として、この獄界で生きること悪くないな。

こうして死んだ俺の新しい人生が始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3328z/>

Powergame in The Hell（下）

2011年12月11日14時48分発行